

## 学校図書館を活用した各教科等における学習モデルの提示（1年次）

### － 中学校における学校図書館機能を活かした学習の創造 －

中町 タ子（京都市総合教育センター研究課 研究員）

情報通信技術の発達めざましい現代、子どもたちは疑問や課題に対する答えを、インターネット検索により安易に求める傾向がある。しかし、情報の溢れるこの時代だからこそ、子どもたちには多面的・多角的な観点から事象をとらえて検討したり、複数の観点から見た情報を組み合わせる新しい考えを創造したりする力が必要である。これらの力を学校教育の中でつけるため、日本十進分類法に基づく学校図書館の図書分類を各教科の授業で活用することが有効ではないかと考えた。

本研究では、図書分類の観点をもとに学習内容を整理する「分類ワークシート」を考案し、中学校社会科の授業実践を通して、その効果を検証した。また図書分類を手掛かりに異なる観点からの情報を集め、それらを組み合わせて考える学習活動や、学習対象の全体像をとらえ、その中から更にテーマを絞って学びを深めていく学習活動などに取り組んだ。

研究を通して、子どもたちの思考の広がりや深まり、自ら学ぶことによる興味関心の高まり、協働して学ぶことで高まる学習効果など、様々な効果が見られた。また学校図書館を活用した授業実践を通じ、指導者側の課題として、学習課題の精選や提示の仕方、学習支援の在り様など、指導者として学び深めたい内容にも気付くことができた。

# 目 次

|                                  |    |                                     |    |
|----------------------------------|----|-------------------------------------|----|
| はじめに                             | 1  | 第2節 複数の観点から見た情報を関連付けて課題を解決するための授業   |    |
| 第1章 これからの時代に求められる<br>資質・能力と学校図書館 |    | (1) 授業の概要                           | 13 |
| 第1節 今求められる資質・能力                  | 2  | (2) 授業を通して見えてきたこと                   | 14 |
| 第2節 学校図書館の魅力                     |    | 第3節 様々な情報を活用して自ら課題を設定し追究するための授業     |    |
| (1) 自身の授業経験から                    | 3  | (1) 授業の概要                           | 18 |
| (2) 学校図書館のもつ機能                   | 3  | (2) 授業を通して見えてきたこと                   | 18 |
| 第3節 学校図書館を活用した授業の現状              | 5  | 第4節 学校図書館で追究した内容を学級全体で共有し学習内容を深める授業 |    |
| 第2章 各教科等の授業で活用する学校図書館            |    | (1) 授業の概要                           | 19 |
| 第1節 学校図書館を活用する意義                 | 7  | (2) 授業を通して見えてきたこと                   | 20 |
| 第2節 学校図書館を活用した授業                 |    | 第5節 授業充実のための連携について                  |    |
| (1) 分類に着目する                      | 8  | (1) 学校図書館運営支援員との連携                  | 21 |
| (2) 図書分類を活用した学習モデル               | 8  | (2) 公共図書館との連携                       | 22 |
| (3) 分類ワークシート                     | 10 | 第4章 研究の成果と課題                        |    |
| 第3章 授業実践から                       |    | 第1節 生徒対象アンケート調査の結果から                | 23 |
| 第1節 多角的な観点から課題をとらえるための授業         |    | 第2節 個別の課題を追究したレポートから                | 28 |
| (1) 授業の概要                        | 11 | 第3節 学校図書館を活用した学習を通して見えてきたこと         | 29 |
| (2) 授業を通して見えてきたこと                | 11 | おわりに                                | 30 |

<研究担当> 中町 夕子 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立高野中学校  
京都市立山科中学校

<研究協力員> 森 茂昭 (京都市立高野中学校教諭)  
佐藤 幸大朗 (京都市立山科中学校教諭)  
佐藤 翼 (京都市立山科中学校教諭)

## はじめに

平成26年11月に出された『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)』(以下「諮問」という)の冒頭は「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は、厳しい挑戦の時代を迎えていると予想されます」(1)という文章で始まっている。情報通信技術の急激な発展により、手元の端末から、求める知識・情報が瞬時に得られる時代になった。これまでの学校教育では、基礎的な知識を子どもたちに習得させることに多くのエネルギーを割いてきた。しかし、もはや情報はコンピュータに記憶され、インターネット上には様々な「答え」が溢れている。子どもたちの日常にはインターネットに接続できる機器が身近にあり、情報検索はもとより、隣にいる友人との会話まで、SNS(Social Networking Service)などのインターネットを介して行う様子が見られる。内閣府の調査によれば、中学生のインターネット利用時間は1日平均130.2分、1日2時間以上インターネットを利用している中学生は47.4%(2)と半数近い。このような現状にある子どもたちに、今求められる資質・能力とはどのようなものなのか。

前述の諮問には、新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関連した、OECDをはじめとする様々な教育の取組の共通点として、「ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点」(3)が挙げられている。現代の子どもたちは、ある事柄についての疑問や課題が生まれたとき、インターネットで容易に「答え」にあたる情報を検索することができる。しかしその活動は、他者によって考え出された知識や情報を見つけることにすぎず、子どもたち自身が思考力を働かせて答えを創り出したことにはならない。知識や情報を探したり、得た情報通りのことを実行に移したりするだけならば、機械や人工知能にも可能な時代である。これからは、人間だからこそできる多様で自由な発想や行動を身につけ、既存の知識・技能をもとに新しい価値を創造する力が、今まで以上に必要とされる。

そのためには、単に答えや方法がわかるのではなく、なぜその答えなのか、その方法にどのような意味があるのかなど、考えが構築された過程や背景を知り、応用発展させる能力を身に付けなければならない。

また前述の諮問では「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります」(4)とも述べられている。アクティブ・ラーニングに関する指導方法については様々な研究が成されているが、筆者は指導方法の一つとして、学校図書館を活用した学習を取り入れることが効果的ではないかと考えた。

情報通信技術がこれほどまでに発展する前、人は知識や情報を得るために、書物を多く利用していた。書物には、過去の人たちが考え出した知識や技能、感情に至るまで、様々な情報が収められている。それらを収集し伝え残してきたのが図書館である。図書館で読書や学習をすることは、先人たちの考えやその根底に流れる理念など「考え方」を学ぶ深い学びの機会となり得る。また、図書館では資料は一定のルールに従って整理されており、それぞれに分野のまとまりをもち、各分野の観点から事象をとらえた資料が系統性をもって並べられている。もちろんこのような図書館の機能は学校図書館にも備わっている。そこで、教科学習での学校図書館活用を通して、子どもたちは多面的・多角的に事象をとらえる体験をすることができ、また、各分野を関連付けて考える体験をすることができるのではないかと考えた。そしてこの体験が、インターネットも含め、様々な情報を活用し、実社会で課題を解決する力につながるのではないかと考えた。

ラーニング・コモンズを併設する大学図書館など、図書館は今、静かに本を読む空間という側面だけでなく、様々な表情をもつ場へと変化している。学校図書館も、本を選び読書に親しむ「読書センター」としての役割だけでなく、他者とコミュニケーションしながら、様々な媒体からの情報をもとに新しい価値を創造する場、つまり「学習・情報センター」としての役割を増すと考えられる。京都市の小中学校では平成27年3月までに「学校図書館大改造」を終えた。この事業により本市学校図書館でも、読書活動はもちろんのこと、学習活動を支援する機能の充実が図られている。

そこで本研究では、学校図書館機能、特に図書分類に着目し、各教科等の授業で課題を多面的・

多角的にとらえ、解決する学習モデルを開発する。今年度は、中学校社会科の授業を通して開発に取り組む。また、各教科等をつなぐ学びも視野に入れ、研究を進める。

・ラーニング・コモンズ

複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員によるサービスも提供する。(5)

・学校図書館大改造

学校図書館の蔵書を一冊ずつ点検し、日本十進分類法に基づく図書の配架や書架の移動など大がかりなレイアウト変更を行う取組。(6)

- (1) 文部科学省中央教育審議会「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」2014.11.20 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm) 2016.3.4
- (2) 内閣府「平成26年度青少年のインターネット利用環境実態調査調査結果(概要)」2015.3 [http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h26/net-jittai/pdf/kekka\\_sokuhoul.pdf](http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h26/net-jittai/pdf/kekka_sokuhoul.pdf) p.6 2016.3.4
- (3) 前掲 (1)
- (4) 前掲 (1)
- (5) 文部科学省「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」用語解説 2010.12 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm) 2016.3.1
- (6) 京都市教育委員会「第3次子ども読書活動推進計画」2014.3 <http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000164/164877/keikakusassi.pdf> p.16 2016.3.4

## 第1章 これからの時代に求められる資質・能力と学校図書館

### 第1節 今求められる資質・能力

産業社会から知識基盤社会へと社会構造が大きく変化している今日、教育の在り方も転換をせまられている。産業革命以降、多くの国は工業生産を基礎として発展してきた。そのため学校は社会の求めに応じ、画一的な方法や答えを共有し、全員に同じ内容を教授することで、産業の発展に資する人材を広く育てる教育を行ってきた。また、そうすることによって教育のすそ野を広げてきた。しかし、急速に変化する社会の中では、常に新しい課題が生まれるため、既存の知識を得ることに

とどまらず、それらの知識を統合し、正解のない課題を解決する力が必要とされる。

平成25年3月、国立教育政策研究所が出した「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」（以下「報告書5」という）には「知識基盤社会とは、新しい知識やアイデア、技術のイノベーション（創出）がほかの何よりも重視される社会である」（7）と記されている。知識基盤社会を生きる子どもたちには、既存の知識や方法にとどまらず、「情報や知識を入手し、それを統合して新しい答えを創り出す力」（8）を付けていく必要がある。

また、平成27年、教育再生実行会議が出した「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について（第七次提言）」（以下「第七次提言」という）の中には「近い将来には、様々な労働が機械に置き換わるだけでなく、頭脳労働の一部が人工知能に代替されたり、高度な頭脳労働において人工知能が人間のパートナーとなったりする時代が来る」（9）と記されている。従来人間が担ってきた肉体労働や頭脳労働が機械に置き換わるとすれば、人間は機械では代替できない能力を磨き、発揮していく必要がある。第七次提言では、人間が優位性をもつ資質・能力として「あらかじめ正解のない問いや自ら設定した課題に挑戦していく活動」「創造性や高い専門性を発揮して行う活動」「人間の感性や思いやりが求められる活動」（10）の価値がこれまで以上に高まると述べられている。学校教育では、これらの資質・能力を育成することを意識して、教育活動を行うことが求められる。

更に「報告書5」では「社会の変化に対応できる汎用的な資質・能力を教育目標として明確に定義する必要がある」「資質・能力の育成は、教科内容の深い学びで支える必要がある」（11）とも述べられている。汎用的な資質・能力とは、ある問いに対応する答えを多く身に付けることではなく、存在する知識や情報を収集し、統合し、最適解を導き出したり、新しい価値を生み出したりする思考の過程を構築できる力であるとする。思考の過程を豊かに身に付ければ、また、思考の過程そのものを応用発展させることができれば、別の課題を解決する場合や、容易に解決できない課題に直面した場合でも、主体的に考え、問題解決をはかることができるだろう。そのためにはなぜその考えが生まれたのか、どのような過程を経てその

結論が考え出されたのかなど、思考の過程や背景について子どもたちが体験的に学べる活動を授業の中に取り入れることが必要であると考え。

## 第2節 学校図書館の魅力

### (1) 自身の授業経験から

子どもたちが主体的に学ぶ授業スタイルの一つとして、いわゆる「調べ学習」がよく行われる。筆者も、担当教科である中学校社会科の授業や総合的な学習の時間に、学校図書館の資料やインターネットの情報を使った調べ学習をした経験がある。その際、子どもたちが提出したレポート等を比較すると、学校図書館で学習したレポートのほうがインターネットの情報のみを使って学習したレポートよりも、子どもたちが自身で構成した意見が述べられ、子どもたちの思いが表現されたレポートになっていた。そこで、改めて学校図書館で学習する子どもたちの様子を思い浮かべてみると、学習結果に影響を与えているのではないかと考えられる様子が以下のようにいくつも想起された。

まず、複数の図書資料を手取る子どもたちの様子である。子どもたちは関連のありそうな図書を数冊選び、学校図書館にある大机の上に複数冊を広げて調べていた。あらかじめテーマを決めて調べ学習を開始するのだが、調べる過程でテーマを変更して本を取り換える子どもや、求める情報が見つからず、学校図書館内を歩き回り、本を探している子どもも見られた。インターネットの情報を調べる際には、いくつかのウェブサイトを開いていても、途中でどのウェブサイトを見ていたのかわからなくなり、最終的には一つのページまたはウェブサイト調べ切ってしまう子どもが多いと感じた。

次に、書架の前でテーマに関連する本を読みふける子どもたちの様子である。インターネットの情報を調べる際には、すぐにページを写し取ったり印刷したりする様子が見られたが、学校図書館では、ノートに書き写す前に本をじっくり読んでいる子どもたちの様子が目立った。この様子は、取り立てて本好きとはいえない子どもにも見られた。

更に、お互いの本を覗き込む子どもたちの様子である。多くの学校図書館には大きい机が設置されており、子どもたちは自然と向かい合って学習を進める。その中で、資料の貸し借りをしたり、自分が見つけた情報を見せあったりしている様子が見られた。コンピュータ室ではあまり見られな

い光景であった。

他にも、一見テーマに関連のなさそうな本を手にとってから、改めてテーマに関する本を探し直す子どもの様子や、ほとんどの子どもがあきらめたり投げ出したりすることなく学習に取り組む様子など、学校図書館で学習する子どもの様子には、印象的な点がいくつも見られた。

これらの経験から、学校図書館には子どもたちの学習を豊かにする仕組み、つまり学びを広げたり深めたりする仕組みがあるのではないかと考えるようになった。

現代の子どもたちは、生活の中で日常的にインターネット上の情報と接している。したがって、疑問や課題を解決しようとするとき、その答えをインターネット検索によって求めようとするのがほとんどである。インターネット検索には、求める答えに素早くたどり着けるなど様々な利点がある。更に、過去の検索履歴などをコンピュータが分析し、利用者の求めに合いそうな情報を優先的に選び出してくる機能まである。一方、学校図書館で本を使って課題を解決しようとするとき、求める情報がどの本にあるのか、どのページを探せばよいのかなど、煩雑な過程をたどることが多い。求める情報にたどり着くまで、試行錯誤しながら自らの判断で情報を探していくことになる。現代の子どもたちにとって、疑問に対する答えはインターネット上に溢れており、それで十分と感じられるかもしれない。しかし、それ故に安易に正解を求める一面もあるだろう。

学校図書館の資料を使った学習では、前述のように子どもたちの多様な学びの姿が見られた。これはまさに「報告書5」に述べられた「情報や知識を入手し、それを統合して新しい答えを創り出す」学習を、子どもたちが主体的に行っていたといえるのではないだろうか。

そこで筆者は、前節で述べた学力を育成するため、学校図書館の機能を授業に取り入れることが有効であると考えた。

### (2) 学校図書館のもつ機能

学校図書館の機能として、「児童生徒の『読書センター』機能及び『学習・情報センター』機能という2つの柱」<sup>(12)</sup>がある。本研究では主に、「学習・情報センター」としての図書館機能に着目して論を進める。

前述のとおり、子どもたちにとっては、インターネットで疑問を解決することが日常的な手段と

なっている。それでは、子どもたちが疑問や課題を解決するとき、学校図書館を活用した場合とインターネットを活用した場合、それぞれどのような特徴があるのだろうか。図1-1は、学校図書館とインターネット、それぞれを活用した学びの特徴について筆者の考えをまとめたものである。

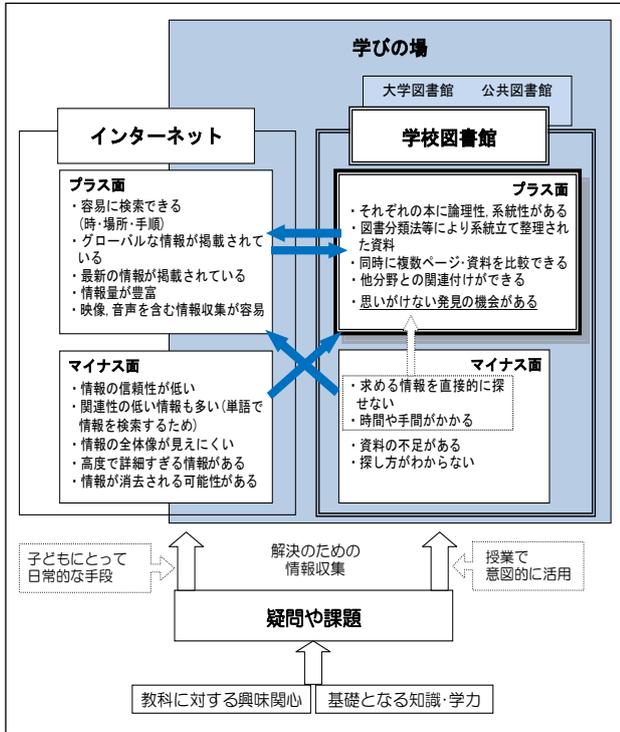


図1-1 学校図書館とインターネットそれぞれを活用した学びの特徴 (私案)

これらを比較する中で学校図書館の特徴として筆者が特に注目したのは、次の二点である。

一点目は、図書が一定のきまりに従って分類されている点である。分類によって、図書は一定の系統性をもって並べられる。また、そこに並ぶ一冊一冊の図書には、それぞれの内容に論理性や系統性がある。学校図書館の分類機能を使うことで、子どもたちは、情報の属する分野や系統性を、俯瞰的に見て理解することができるのではないかと筆者は考えた。また京都市では、学校図書館大改造によって、図書分類を日本十進分類法に基づく図書の排架に統一している。日本の多くの図書館では、日本十進分類法によって分類が行われており、国立国会図書館のキッズページにも「日本で一番使われている分け方が、日本十進分類法です」(13)と紹介されている。この図書分類を使いこなすことは、子どもたちにとって、在学中のみならず卒業後も公共図書館などで学びを深める際に活用できる力である。

二点目は、同時に複数のページを並べて比較す

ることができる点である。これは、コンピュータの画面上でも可能である。しかし、自分で本を手に取り、ページを開いたり、机の上で並べて比較したりすることで、子どもたちは情報を収集・比較することについて、仮想ではなく現実の体験をすることができる。

しかしながら、インターネットを活用した場合と学校図書館を活用した場合を比較すると、学校図書館を活用した場合には次のようなマイナス面があると考えられる。求める情報を直接的に探せない、時間や手間がかかる、資料が不足している、情報の探し方がわからないなどである。これらの点はマイナス面ととらえられるが、一方で次のようにプラスに転じる可能性があるともいえる。

一点目は、学校図書館法の一部改正により配置がうながされている、「専ら学校図書館の職務に従事する職員」いわゆる「学校司書」(14)や、公共図書館との連携を活かすことでプラスに転じる可能性である(「専ら学校図書館の職務に従事する職員」を京都市では「学校図書館運営支援員」と呼んでいる。以下「図書支援員」という)。図書支援員による資料探しのアドバイスによって、子どもたちは新たな情報に目を向けたり、専門的な情報を知ったりする可能性がある。また、公共図書館と連携することで、子どもたちが活用できる資料の選択肢は大きく広がる。更に、公共図書館を活用して学ぶという選択肢が、子どもたちが生涯学び続ける場の一つとして認識される。

二点目は、求める情報を直接的に探せないという点である。この点については、他の思いがけない発見につながる可能性があると考えられる。前述した学校図書館での子どもたちの様子にも、求める情報を探して館内を歩き回る姿がある。インターネットでは、情報が検索した単語に関連して表示されることになる。したがって、求める内容の情報か否かに関わらず、受動的に多くの情報を手に入れることになる。しかし、学校図書館では、同じ分野の様々な情報が書架に並んでおり、テーマの異なる隣の本を手にとることも容易である。しかも、学校図書館内を見渡しながら歩き回ることができ、その過程で目に留まった資料を手にとることもできる。インターネット検索とは対照的に、子どもが、迷いながらも自らの感覚を使いながら、自らの興味や判断で、能動的に情報を選びとっていくことになる。

三点目は、インターネットを活用して学ぶ際、学校図書館で図書資料を使う体験が役に立つとい

うことである。インターネット上の情報は、分類されず、また、真偽も定かでないものが混在している。そのような情報を学習のために活用するには、その中から必要な情報を選びとったり、その情報を頭の中で分類して活用したり、より正確な情報にたどり着くために検索のキーワードを追加したり、出典を確認したりすることが必要となる。これらの力を付けるには、学校図書館での分類を意識した学習体験が生けると考える。

現在、学校図書館にも、インターネットに接続できる環境が整えられてきている。インターネット上の情報と図書資料の両方を使いこなす基礎として、学校図書館の魅力ある機能を活かした学習体験が必要である。

### 第3節 学校図書館を活用した授業の現状

図1-2は平成26年度全国学力・学習状況調査報告書(15)からの抜粋で、学校質問紙において「調査対象学年の児童生徒に対して、前年度に、『朝の読書』などの一斉読書の時間を設けましたか」の質問項目に対する中学校の回答を示したものである。



図1-2 一斉読書の実施状況 (H26全国学力・学習状況調査報告書)

図1-2を見ると、一斉読書については、平成26年度調査で「基本的に毎日行った」と回答した中学校は63.8%であり、6割以上の中学校で、一斉読書に取り組んでいることが読み取れる。

一方、右上図1-3は、同報告書(16)において「調査対象学年の児童生徒に対して、前年度に、学校図書館を活用した授業を計画的に行いましたか」

の質問項目に対する中学校の回答を示している。

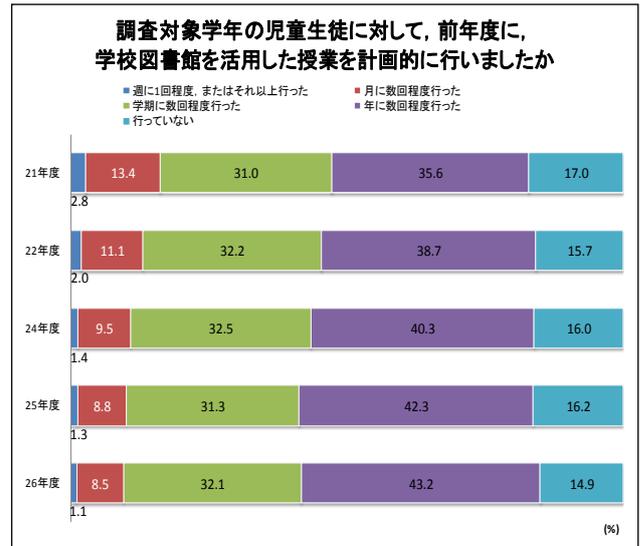


図1-3 学校図書館を活用した授業の計画的な実施状況 (H26全国学力・学習状況調査報告書)

図1-3を見ると、学校図書館を活用した授業については、平成26年度調査で「週に1回程度、またはそれ以上行った」「月に数回程度行った」と回答した中学校は合わせて9.6%であったのに対し、「年に数回程度行った」「行っていない」と答えた中学校は合わせて58.1%であった。この調査から、一斉読書に取り組んでいる中学校は多いが、学校図書館を活用した授業が日常的に行われている中学校は半数に満たないということがわかる。

では、京都市の現状はどうだろうか。図1-4は、平成25年6月に実施した本市中学校教員対象のアンケート調査(17)からの抜粋で、質問項目「あなたの学校では、平成24年度に、各教科等で学校図書館を活用した授業を行いましたか。」に対する回答結果を示したものである。



図1-4 学校図書館を活用した授業の実施状況

図1-4を見ると、「あまり行っていない」「行っていない」と回答した学校が合わせて57.1%と、半数を超えている。更に、「『あまり行っていない』『行っていない』と回答した方にお尋ねします。あなたの学校では、なぜ、各教科等で学校図書館を活用した授業が行われなと思いますか。あてはまるもの全てをお答えください。」との質問項目に対す

る回答結果が図1-5である。

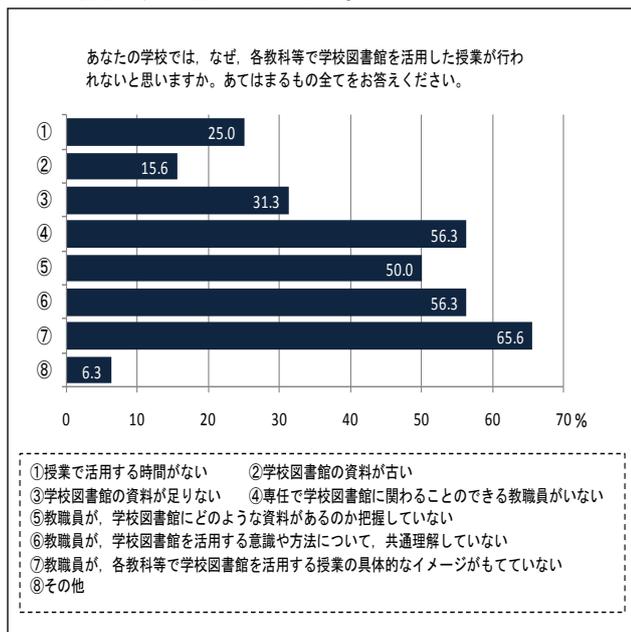


図1-5 各教科等で学校図書館を活用した授業が行われない理由

図1-5を見ると、「各教科等で学校図書館を活用した授業が行われない理由」として、中学校教員の半数以上が挙げた項目は、「教職員が、各教科等で学校図書館を活用する授業の具体的なイメージがもてていない(65.6%)」「教職員が、学校図書館を活用する意義や方法について共通理解していない(56.3%)」「専任で学校図書館に関わることのできる教職員がいない(56.3%)」「教職員が、学校図書館にどのような資料があるのか把握していない(50.0%)」であった。

「専任で学校図書館に関わることのできる教職員がいない」については、京都市では平成27年度より図書支援員を全中学校区に配置している。この施策により、以前に比べ状況が改善されると期待できる。「学校図書館を活用する授業の具体的なイメージがもてていない」については、平成26年度に京都市教育委員会が「中学校学校図書館活用実践事例集」をまとめ、現場の教員が具体的な授業のイメージをもちやすいよう、指導案を示している。「教職員が、学校図書館にどのような資料があるのか把握していない」の結果からは、教職員が学校図書館に足を運んでいない状況が推測できる。これは図1-4に示された結果とも関連すると考えられる。

図1-5の結果で筆者が最も注目した項目は「教職員が、学校図書館を活用する意義や方法について共通理解していない」である。中学校で学校図書館活用が進みにくい背景には、各教科担任が授

業で学校図書館を使う意義や必要性を強く感じていないことが原因の一つではないかと考える。これについては、第2章以降で述べる。

表1-1は、平成26年度全国学力・学習状況調査報告書(18)の生徒質問紙において「読書は好きですか」の質問項目に対する回答と平均正答率を示したものである。

表1-1 質問事項「読書は好きですか」に対する回答と平均正答率

| 選択肢               | 当該選択肢を選んだ生徒の平均正答率 |      |      |      |
|-------------------|-------------------|------|------|------|
|                   | 国語A               | 国語B  | 数学A  | 数学B  |
| ①当てはまる            | 77.5              | 60.2 | 80.3 | 61.9 |
| ②どちらかといえば、当てはまる   | 71.3              | 54.0 | 77.7 | 57.1 |
| ③どちらかといえば、当てはまらない | 68.6              | 51.2 | 76.6 | 55.3 |
| ④当てはまらない          | 63.8              | 45.4 | 73.2 | 50.0 |

この調査結果を見ると、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答を選択した生徒の平均正答率が、全ての教科で高いことがわかる。したがって、読書が好きなことと、この調査で測られた学力との間には関連があるといえる。この質問項目では一般的な読書について尋ねているため、学校図書館の活用、更には授業での活用と、直接関連するとは言いきれない。しかし、読書が子どもの学力に一定の影響を与えるとすれば、「読書センター」と「学習・情報センター」の機能を併せもつ学校図書館を授業で活用することは、子どもたちの学力に何らかの効果をもたらすのではないかと考える。

表1-2は同調査(19)の学校質問紙において「調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、本やインターネットなどを使った資料の調べ方が身に付くよう指導しましたか」の質問項目に対する回答と平均正答率を示したものである。

表1-2 質問事項「資料の調べ方が身に付くよう指導しましたか」に対する回答と平均正答率

| 選択肢           | 当該選択肢を選んだ学校の平均正答率 |      |      |      |
|---------------|-------------------|------|------|------|
|               | 国語A               | 国語B  | 数学A  | 数学B  |
| ①よく行った        | 81.1              | 53.7 | 69.6 | 62.6 |
| ②どちらかといえば、行った | 79.6              | 51.2 | 67.4 | 59.9 |
| ③あまり行っていない    | 78.1              | 49.1 | 65.4 | 57.5 |
| ④全く行っていない     |                   |      |      |      |

この調査項目は、インターネットも含めた資料の調べ方についての質問であるが、やはり「よく行っ

た」「どちらかといえば、行った」と肯定的な回答を選択した学校の平均正答率が、全ての教科で高いことがわかる。従って、学校図書館で図書資料を活用した授業を行い、子どもたちに資料の調べ方が身に付くよう指導することは、子どもの学力を向上させるために一定の効果があると考えられる。

これらの調査結果から、学校図書館を活用して授業を行うことは子どもの学力を向上させるために効果的な方法であると考えられる。しかし、図1-3 (p. 5) からわかるように、学校図書館の活用が日常的に行われていない現状では、「学習・情報センター」としての機能が十分に活用されているといえるだろうか。そこで、学校図書館を活用する学習モデルを提示し、各教科等の授業で学習・情報センターとしての学校図書館を活用する意義や方法について研究を進める。

- (7) 国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」平成25年3月 p.9 [http://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/h25/2\\_10\\_all.pdf](http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h25/2_10_all.pdf) 2016. 3. 4
- (8) 前掲(7) p. 12
- (9) 教育再生実行会議「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について(第七次提言)」平成27年5月14日 p.1 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/dai30/siryoul.pdf> 2016. 3. 4
- (10) 前掲(9) p. 2
- (11) 前掲(7) p. 83
- (12) 子どもの読書サポーターズ会議「これからの学校図書館の活用の在り方等について(報告)」平成21年3月 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/dokusho/meeting/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/08/1236373\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/_icsFiles/afieldfile/2009/05/08/1236373_1.pdf) 2016. 3. 4
- (13) 国立国会図書館キッズページ「図書館じてん」<http://www.kodomo.go.jp/kids/words/05010.html> 2016. 3. 4
- (14) 法律第913号「学校図書館法の一部を改正する法律」第6条第1項 2014. 6. 27
- (15) 文部科学省 国立教育政策研究所「平成26年度全国学力学習状況調査報告書」2014. 8
- (16) 前掲(15)
- (17) 吉田夏紀「学校図書館機能の活用を通じた、主体的に学び続ける力の育成 - 9年間の学びをつなぐ、各教科等における学習活動・読書活動の在り方 -」『平成25年度研究紀要』京都市総合教育センター 2015. 3. 3 p. 5
- (18) 前掲(15)
- (19) 前掲(15)

## 第2章 各教科等の授業で活用する学校図書館

### 第1節 学校図書館を活用する意義

平成25年6月に閣議決定された教育振興基本計画の中では、「子どもたちに基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度などの確かな学力を身に付けさせるため」、①「物事を多様な観点から論理的に考察する力」②「自ら課題を発見し解決する力」③「他者と協働するためのコミュニケーション能力」(20)などの育成を重視することが述べられている。この三点について筆者の考えを述べる。

まず①について述べる。物事を「多様な観点」から論理的に考察する学習をするには、「多様な観点」が、子どもの頭の中で整理されている必要がある。例えば、ある課題についてインターネットで検索したとする。多くの情報が検索結果として表示され、子どもはその情報をもとに考察しようとする。このとき、子どもの意識の中で「多くの情報から考察した」＝「多様な観点から考察した」と認識される可能性がある。しかし「多様な観点」とは、同じ種類の情報を複数使うことではなく、複数の異なる観点から物事を見て、多面的・多角的にとらえることであろう。子どもが多様な観点から考察するためには、活用しようとしている情報がどの観点から対象をとらえた情報なのか、頭の中で整理されていなければならない。そして、他に検討すべき観点からの情報は無いのか考えて、情報を収集しなければならない。図書分類は、この「観点」を体験的に学ぶ有効な手段であると考えた。中学校の教育課程では、教科ごとに事象をとらえる観点が異なる。これに加えて、図書分類を活用することで、図書の排架という目に見える環境で、情報を整理する観点を学ぶことができる。また、図書分類と教科の観点を関連付けてとらえることで、各教科の観点をより明確にしたり、教科と教科のつながりを具体的に感じ取ったりすることもでき、子どもの多面的・多角的な思考力を育成することができる。また、インターネット等の情報を活用する際、情報の真偽を確かめ、出典にあたる必要もある。図書分類を手掛かりに情報の整理ができれば、このような点でも学習を円滑に進めることができる。

次に②について述べる。「課題を発見し解決する力」を育成するためには、どのような学習方法が効果的だろうか。奈須は、『答え』は『問い』の数だ

け存在する』『答え』は『問い』の質に全面的に依存する」(21)と述べている。自ら課題を発見し解決する力とは、よりよい問いを創り出し、追究する力と考えられるだろう。では、どのようなときに「問い」が生まれるのだろうか。子どもたちを見ていると、予想と異なる事態に出合ったときや、知らないことに出合ったときに問いが生まれていると感じる。この体験には、情報との出会いも含まれるのではないだろうか。その情報が正解に導く画一的な情報ではなく、思いがけず出合った未知の情報や、予想外の情報であるとき、更に、自らの手で発見した情報であるとき、子どもの中では新たな問いが生まれやすいのではないかと考える。また、生まれた問いを解決するとき、一つの分野を深く掘り下げる、複数の分野の観点からその事象を見つめ、考察するなど、その事象にせまる切り口が明確であるほうが思考を整理しやすい。それには、あらゆる情報を、分野を意識して手に取れる環境が望ましい。学校図書館は、このような出会いと思考を広げ深める環境を提供できると考える。

更に③について述べる。他者と協働して課題を解決するコミュニケーション能力の重要性は、あらゆる教育の場面で叫ばれている。授業でも積極的に言語活動が取り入れられている。協働学習、言語活動には、様々な手法があるが、場のデザインによって、そのような学習スタイルが自然に生まれる工夫がなされている例もある。京都市でも、学校図書館大改造によって子どもたちが学習しやすい大型の机と椅子が導入されるなど、協働学習や言語活動を行いやすい環境が整えられている。

以上のことから、これからの時代に求められる資質・能力を育成する機能が、学校図書館には備わっているといえる。インターネットが普及する以前は、これらの機能が知らず識らずのうちに活用されていたかもしれない。しかし現代の子どもたちは、生まれた時から日常生活の中にインターネット環境がある。そして、インターネットを経由した多くの情報にさらされている。だからこそ、学校教育の教科授業等において思考力・判断力・表現力を育むために、意図的に学校図書館を活用する必要がある。

## 第2節 学校図書館を活用した授業

### (1) 分類に着目する

前節で述べた学校図書館の利点を活かすため、

具体的に何を活用すべきか考えた。学校図書館の様々な機能の中で、特に活用できると考えたのは図書分類である。

学校図書館を含む多くの図書館では、蔵書を一定のルールによって整理している。図書資料は資料分類表に基づいて排架され、検索しやすいように目録が作成されている。鮎澤は「資料分類表を成立させている資料分類法の原理は、知識の分類に準拠している。そのわけは、図書館資料自体が知識の集積であるからである」(22)と述べている。つまり資料分類法は、知識を網羅的に分類できる方法であるのとらえることができる。子どもたちが獲得すべき知識も、いずれかの分類に体系づけることが可能である。

資料を組織化する方法は、排架分類、分類目録、件名目録など、多岐にわたる。しかし学校図書館において、子どもたちが利用できる目録を作成しているところが多いとはいえない。手軽に活用できるのは分類記号を用いた排架分類であろう。中学校国語の教科書にも「図書館の活用」として「図書館の本は、日本十進分類法にもとづいて分類されていることが多い。そのおおよそを理解しておこう」(23)と紹介されている。そこで筆者は次のように考えた。日本十進分類法を教科等の学習事項と結びつけ、知識・情報を整理する枠組みとして活用する。更に学校図書館でその知識・情報を深めたり、関連させたりしながら探究型の学習を進める。これらを各教科等で行えば、子どもたちの頭の中で、中学校で学習する内容が体系的に理解され、これらを活用して新しい価値を創造する学習につながりやすくなる。また、授業外の時間でも、子どもたちが自主的に学ぶ手掛かりとなる。この考えに基づき、図書分類を活用した学習モデルを開発した。

### (2) 図書分類を活用した学習モデル

前節で述べた図書分類を活用した学習は、いくつかのパターンに分け段階を追って指導する必要があると考えた。そこで、四つのパターンに分けた学習モデルを次ページ図2-1から図2-4に示す。

図2-1は、多角的な観点から課題をとらえることを目的とした学習である。この学習では、学習事項を、図書分類を手掛かりに分類することで、課題の全体像をとらえやすくする。そして、教科書では十分でない情報や疑問をもったことについて、学校図書館で補ったり広げたりすることで、学習内容を深める。学校図書館で得られない情報

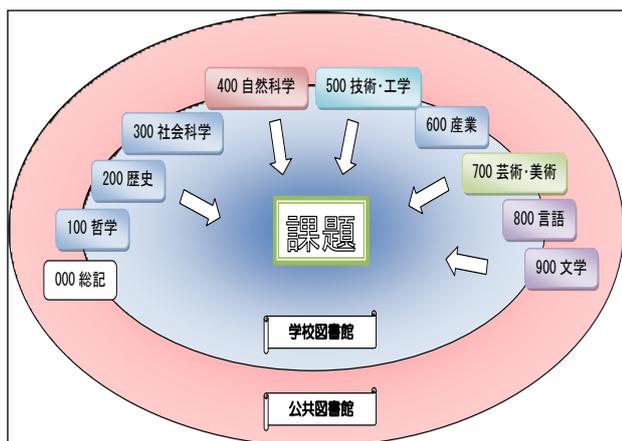


図2-1 多角的な観点から課題をとらえる学習

や、更に発展的に学びたい内容については、公共図書館を活用することによって充実させていく。このような学習を通して、子どもたちは多角的に課題をとらえる観点を体験的に学びとっていく。これは、学校図書館を活用した学習の基礎として位置付けるものである。

図2-2は、ある課題を解決するために、いくつかの観点を經由して考える学習である。

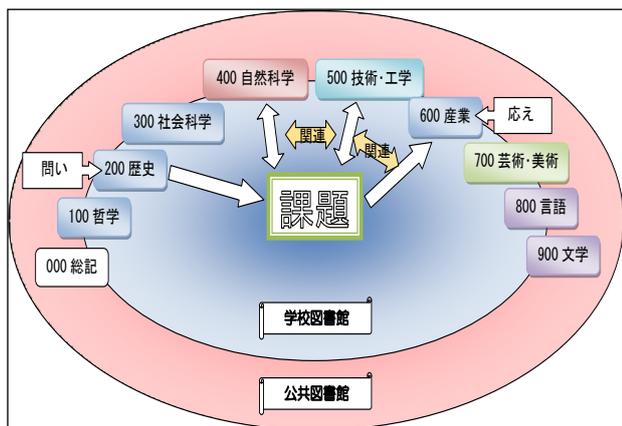


図2-2 複数の観点から見た情報を関連付けて課題を解決する学習

この学習は、ある分類で得た情報から課題を見つけ、他の分類の情報にあたり、複数の観点から見た情報を関連付けて、課題を解決したりすることを目的としている。これによって、子どもたちは小さな問いを連続させ、課題解決へと近づいていくことができる。また、他の分類へと移動していく中で、予想外の情報に出合ったり、思いがけない情報との関連に気付いたりする可能性が高まる。

右上図2-3は各教科等で学校図書館を活用した学習に取り組む中で、様々な事柄や課題を図書分類及び各教科の観点からとらえることを目的とした学習である。

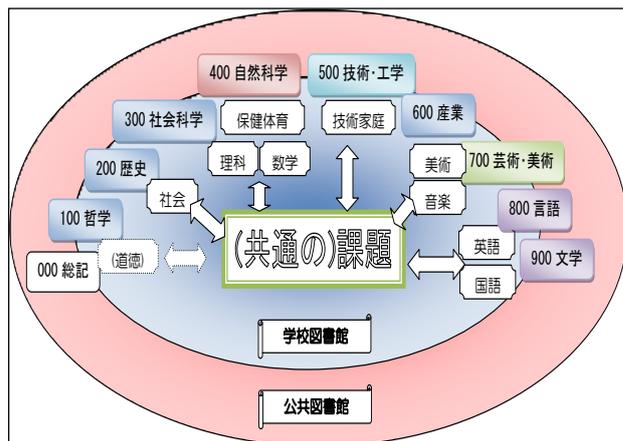


図2-3 課題を各教科の観点からとらえる学習

教科担任制をとっている中学校では、小学校に比べ、一人一人の指導者が他教科との関連を常に意識して授業を行うことはむずかしい。しかし、各教科の学習内容を見てみると、よく似た内容または共通の課題を、それぞれの教科の観点を切り口として学習していることがある。また、授業をしていて、子どもたちから「他教科で習った」という発言を聞くこともある。各教科等で学校図書館を活用し共通の課題に取り組むことで、各教科の観点がより明確になる。また、全教科で学校図書館を活用した授業を行うことで、子どもたちの中で学習内容が教科の枠を越えて体系化されることが考えられる。更に、各教科や分類の観点を明確にしながらか課題を追究することで、実社会の中でその事柄がどのような意味をもち、何が課題であるのかが明らかになると考えられる。

図2-4は、子どもが自らの疑問に対して自ら課題を設定し、様々な情報を活用して追究する力の育成を目的とした学習である。

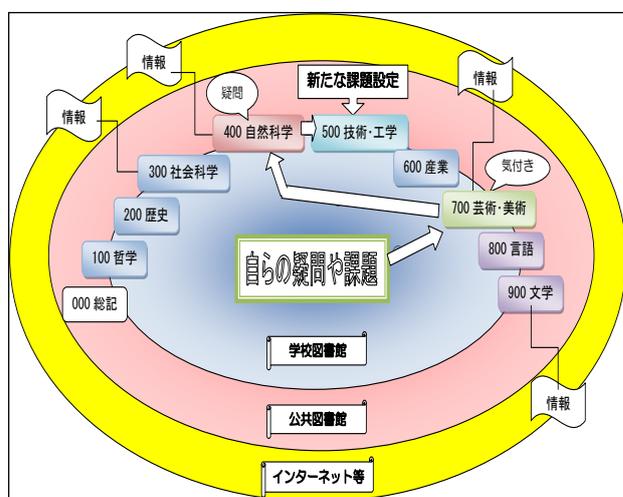


図2-4 様々な情報を活用して自らの課題を追究する学習  
この学習は、子どもたちが疑問や課題を解決する

際、様々な媒体からの情報を活用して、自ら課題解決する力の育成を目的としている。学校図書館や公共図書館の図書資料で得られる情報はもとより、インターネット等で得られる情報についても、それぞれの分類に整理し、原典にあたりながら探究していくことができる。この学習パターンを身に付けることで、将来的に大学図書館や公共図書館、マスメディア、インターネットなどの様々な媒体から得た情報を整理し、関連付け、学び続けることができる力がつくと考えられる。

以上のように、分類を手掛かりに情報の観点を整理し、関連付けて考える学習の段階を踏んでいく。そのことで子どもたちは、物事を多様な観点から見る力、課題を発見する力、様々な情報を関連付けて思考し、課題を解決する力を身に付けると考えられる。また、授業形態や課題の工夫によって、他者と協働して課題解決にあたる授業を展開することができる。更に、全教科で取り組むことにより、指導者が意図した場合はもちろんのこと、意図的でなかったとしても、子どもたちは各教科の内容を関連させて学ぶことが可能である。

### (3) 分類ワークシート

図書分類を枠組みとして活用し、思考の整理をするためには、子どもたちに一定の型を示す必要があると考えた。そこで日本十進分類法の第一次区分で構成した図2-5のような分類ワークシートを作成した。

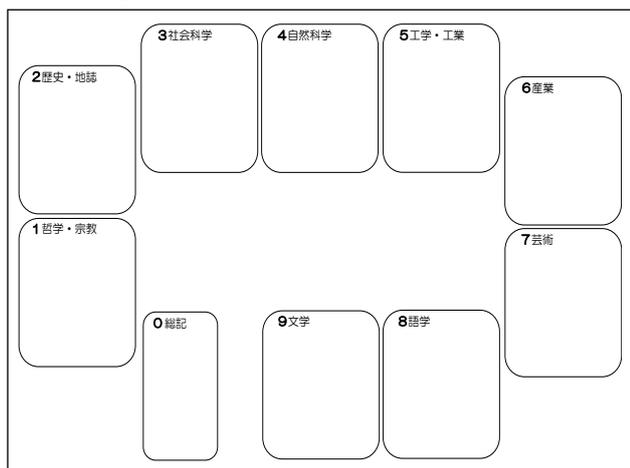


図2-5 分類ワークシート

子どもたちが教室の授業や家庭での学習で、このワークシート上に情報を整理していく。すると、情報が目に見える形で、各分類の観点ごとに整理される。そして、このワークシートを手には、学校図書館の書架を行き来しながら情報を追加したり、追究したりすることができる。また、整理した情

報を関連付けて新たな問いや考えを作ること、ワークシート上で進められる。

このワークシートを使う利点は他にもある。異なる学習事項も体系的に情報を整理でき、比較することができる点である。社会科で例を挙げると、地理的分野では地域間の比較、歴史的分野では時代間の比較などが容易にできる。また、地理的分野と歴史的分野を比較・関連させて考えたり、それらを公民的分野に応用したりすることも可能である。このことにより、地域や時代、社会構造などの特徴がとらえやすくなったり、新たな問いが生まれやすくなったりすると考えられる。

しかし、このワークシートを必ずしも使い続ける必要はなく、子どもたちの頭の中に情報を整理する枠組みができれば、ノートに自分で整理するとよいと考えている。教科や学習内容によっては、第一次区分が枠組みとして適さないものもある。その場合は第二次区分や第三次区分などの詳細な分類を活用していくことも考えられる。また、追究する課題に合った枠組みを自ら考えて思考を整理することも必要であると考えられる。

なお、図書分類の詳しい内容については、国語科の授業で指導が為されている。また、各学校で行われる図書館オリエンテーションでも図書支援員が指導している。本研究の授業実践では、京都市教育委員会作成の「図書活用ノート」(24)を活用することとする。

(20) 文部科学省「第2期教育振興基本計画」2013.6.14 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/\\_icsFiles/afie1dfile/2013/06/14/1336379\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afie1dfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf) p.37 2016.3.4

(21) 奈須正裕「子どもの『問う力』を育てる」『指導と評価722号』日本教育評価研究会 2015.2 p.6

(22) 鮎澤修『新現代図書館学講座10 資料組織概説』東京書籍 1998.2 p.207

(23) 『国語1』光村図書出版 2010.2文部科学省検定済教科書 p.21

(24) 京都市教育委員会「図書活用ノート」平成27年版

## 第3章 授業実践から

本章では、授業実践について述べる。授業実践は、京都市立中学校2校(以下「A校」「B校」という)で行った。対象学級はA校第1学年5学級、第2学年5学級、B校第1学年2学級で、いずれも社会科(地理的分野)の授業であった。学校図書館を活用した授業では、京都市図書館から団体貸出を受けた。

## 第1節 多角的な観点から課題をとらえるための授業

本節では、図2-1(p.9)に示した「多角的な観点から課題をとらえる」授業について述べる。

### (1) 授業の概要

本授業の対象学級はA校第1学年5学級、B校第1学年2学級である。この授業では多角的な観点から課題をとらえることを主目的として、図2-5(p.10)の「分類ワークシート」を用いた。両校とも、この授業までに学校図書館を教科授業で利用した時間数は1時間程度であった。

### 〈中学1年地理 世界の諸地域「アフリカ州」〉

この単元の大まかな流れを図3-1に示す。

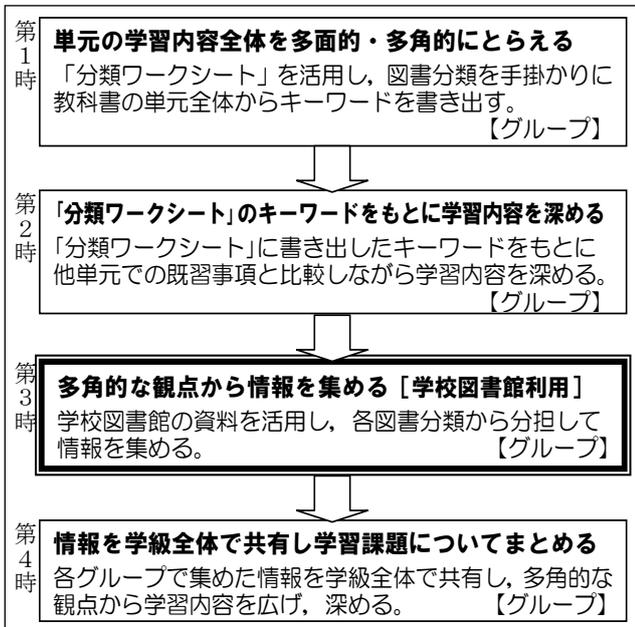


図3-1 世界の諸地域「アフリカ州」授業の大まかな流れ

第1時、教科書7頁にわたる単元全体を読み、教科書に太字で表記された重要語句及びアフリカ州の特色を表すと考えられる語句を「分類ワークシート」に記入するよう指示した。その際「図書活用ノート」(25)に記載された「日本十進分類法」を参考に指示した。また、一つのキーワードが複数の分類に入ると思われる場合には、両方に記入するよう指示した。これらの作業の前段で、既習単元のヨーロッパ州を例に、復習を兼ねて授業者が黒板で例を示した。その様子を右上図3-2に示す。黒板にはヨーロッパ州の情報を残したままにし、生徒が手元の「分類ワークシート」と見比べることができるようにした。そして、ヨーロッ



図3-2 ヨーロッパ州のキーワードを例として示す

パ州とアフリカ州を比較し、異なる点や似ている点を挙げ、その理由を考える課題を設定した。

第2時、アフリカ州が現在抱える課題について学習した後、第3時にそれらを解決するためのヒントとなるアフリカ州についての情報を、学校図書館で集めた。子どもたちには、課題をとらえる観点を明確にするため、グループごとに図書分類を指定し、担当する図書分類からアフリカ州に関する情報をできるだけ多く集めるよう指示した。見つけた情報は図3-3に示す「情報カード」(26)に記入するよう指示した。

|         |          |     |   |     |
|---------|----------|-----|---|-----|
| 調べたこと   |          |     |   |     |
|         |          |     |   |     |
|         |          |     |   |     |
|         |          |     |   |     |
| 使った資料   | 題名       |     |   | ラベル |
|         | 著者(編・監修) | ページ |   |     |
|         | 出版社(発行所) | 発行年 | 年 |     |
| 年 組 ( ) |          |     |   |     |

図3-3 情報カード

第4時、図書館で集めた情報を共有し、各自の「分類ワークシート」に情報をキーワードで追加した。その後、集めた情報をもとにアフリカ州が持続的に発展する方法をグループで考える課題を設定した。

### (2) 授業を通して見えてきたこと

右図3-4は、教科書から「分類ワークシート」にキーワードを分類して書き出す作業の様子である。授業実践を行った7学級の子どもたちは、教科書のキーワードをノートに書き出すという学習の仕方



図3-4 「分類ワークシート」にキーワードを分類する様子

を経験したことがあったため、作業は比較的スムーズであった。

「分類ワークシート」にキーワードを書き出していきにあたり、子どもたちはキーワードの意味を考え、分類していた。どの分類に入るか迷う場合はグループの仲間に相談するよう指示していたため、グループ内でキーワードについての会話が多く生まれた。その一例を以下に示す。

S1:「『レアメタル』ってどこに入る？」  
 S2:「(教科書に)『金属』って書いてあるし自然科学か工業なんちゃう？」  
 S1:「でも『自動車などの生産に欠かせません』って書いてあるで。」  
 S2:「ほな、工業と産業に入れる？」

上の会話からもわかるように、子どもたちはキーワードの意味を理解するために教科書を読み返しながら相談していた。また、分類する作業を通して、一つのキーワードが様々な分野に関連することに、子どもたち自身で気付く様子が見られた。更に、我先にとキーワードを探し出し、書き出していき様子や、他の子どもが見つけない分類のキーワードがないかと探す様子も見られた。結果、たくさんのキーワードを意欲的に探すことにつながっていた。他にも、机間指導する授業者に「いっぱい書いたで」と自慢げに話し、枠が埋まっていくことで学習意欲が増す子どもの様子も見られた。

一方で「キーワードを抜き出せて言われても何を抜き出したらいいのかわからない。」とつぶやいている子どももいた。しかし、キーワードを分類する学習を繰り返し行うことで、どの地域にも共通して出てくるキーワードや、毎回キーワードが多く書きこまれる分類項目などから、地域の特色をとらえるにはどのような観点で、どのような事象に注目すればよいかを、子ども自身でつかむ事ができるのではないかと考える。

図3-5は、第3時、学校図書館での授業で「文学」の図書分類からアフリカ州に関する情報を集める子どもの様子である。子どもたちはそれぞれ、自



図3-5 むかし話の本からアフリカ州の情報を集める様子

分の担当する図書分類の書架へ行き、アフリカ州に関する情報を集めた。最初はタイトルに「アフリカ」という言葉が含まれる本を探す子どもがほとんどであったため、「本が

ない」と途方に暮れる様子が多く見られた。そこで、「分類ワークシート」に書かれたキーワードを手掛かりに本を探すようアドバイスすると、「熱帯林」「砂漠」など、「分類ワークシート」に書き出したキーワードから本を見つけるようになった。「石油・天然ガス」などのキーワードから「エネルギー問題」や「環境問題」を連想して本を探す様子も見られた。また、「芸術」の図書分類から「アフリカの妖怪」についての情報を発見し、喜んで他の子どもたちに報告する子どもの様子も見られた。

第4時、学校図書館で集めた情報を学級全体で共有する際、図3-6のように分類ごとに情報カードをまとめたものを回覧した。

図3-7は、それらの情報を共有している様子である。他のグループが調べた情報を覗き込み「お姫様やって！昔、王様いたんやな。」「アフリカの家やって！これおもしろい！」など、興味をもって情報を読む様子が見られた。

図3-8は、学級の皆が図書館で集めた情報を個人の分類ワークシートに書き足したものである。

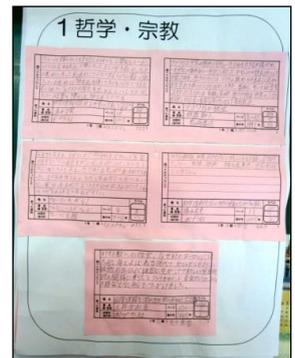


図3-6 分類ごとにまとめた情報カード



図3-7 分類ごとにまとめた情報を共有する様子

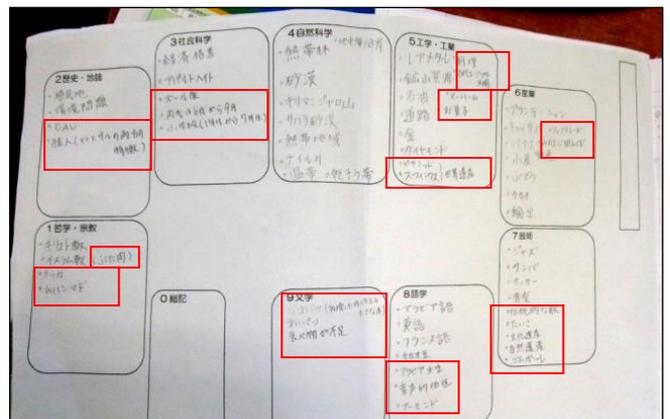


図3-8 図書館で集めた情報が含まれた分類ワークシート

※図中の枠は筆者による  
 この分類ワークシートの記述には、教科書には記載されていない内容(図中枠内)が多く見られる。その一部を次に示す。

【哲学・宗教】イスラム教(ぶた肉)  
 【歴史・地誌】OAU, 猿人(人とサルの特徴)  
 【社会科学】ズール族, 小学校(1年生から7年生)  
 【工学・工業】古代エジプト文明, ピラミッド・スフィンクス(世界遺産)  
 【芸術】たいこ, ゴムボール, アラビア文字  
 【文学】バオバブ(乾燥した所に生える大きな木)

※【 】内は図書分類

これらのキーワードを見ると、子どもたちがアフリカ州について、それぞれの図書分類から教科書の範囲に縛られない情報を広く得ていることがわかる。上に挙げたキーワードのうち「イスラム教」は教科書の本単元に記載されているが、「ぶた肉」という情報が新たに追加されている。このことから子どもの中で、学習内容をより詳しく理解することに繋がったと考えられる。また「バオバブ」は「文学」の分類から集められた情報である。一見関連のなさそうな分野からもアフリカ州の情報を得ていることがわかる。また、「芸術」の分類では楽器や遊びに関するキーワードを見つけている。これらのことから子どもたちは、様々な観点から



図3-9 皆の情報をまとめた「大きな分類ワークシート」

アフリカ州をとらえるという体験ができたのではないかと考える。

B校では子どもたちが調べた情報カードを分類ごとに模造紙に貼り、「大きな分類ワークシート」を作り、図3-9のように廊下に掲示した。

## 第2節 複数の観点から見た情報を関連付けて課題を解決するための授業

本節では、図2-2 (p.9) に示した「複数の観点から見た情報を関連付けて課題を解決する」授業について述べる。

### (1) 授業の概要

本授業の対象学級はA校第1学年5学級、B校第1学年2学級である。この授業では、第1節で述べた「分類ワークシート」に加え、学校図書館で得た複数の異なる情報を組み合わせて課題を解決することを目的とし、右上図3-10に示すワークシート(以下「情報ワークシート」という)を用いた。これは、「情報カード」(図3-3 p.11)を複数組み

図3-10 情報ワークシート

合わせたものである。

## <中学1年地理 世界の諸地域「南アメリカ州」>

この単元の大まかな流れを図3-11に示す。

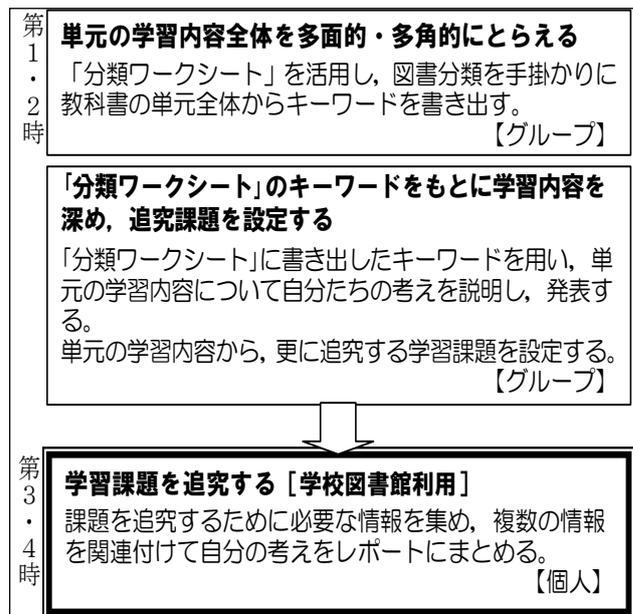


図3-11 世界の諸地域「南アメリカ州」授業の大まかな流れ

第1時、第2時は地形や気候などについて簡単に学習した後、アフリカ州と同様、単元全体のキーワードを「分類ワークシート」に記入し、南アメリカ州の特色を、自然環境や他地域の特色と関連付けて説明するよう課題設定した。このような課題に取り組む際、子どもたちは教科書を参考に特色を挙げることが多い。すると、教科書の文をそのまま抜き出して説明することが多くなる。そこで「分類ワークシート」のキーワードを使って自分たちの言葉で説明するよう指示した。教科書は内容をより詳しく調べるために参照するようアドバイスした。

A校では第3・4時、B校では第3時、学校図書館

で個々に課題を追究した。第2時に教科書の追究課題「ブラジルにみる環境問題と対策」について学習し、同様の課題が世界の他地域で起こっていないか、また解決のための方策は何か、自分の考えをまとめるよう指示した。その際、図3-10の「情報ワークシート」を使用した。A校では図書資料を二冊以上使用することを条件とし、可能であれば図書分類の異なる資料を選ぶよう指示した。B校では、情報を二つ以上集めることを目標として示し、可能であれば複数の図書資料を使うよう指示した。

## (2) 授業を通して見えてきたこと

この授業では、A校とB校で学校図書館を利用した時間数が異なるため、2校を分けて記す。

### <A校の授業実践>

まず学校図書館を2時間利用したA校の授業について述べる。

第1時「分類ワークシート」にキーワードを書き出す作業は、アフリカ州の2/3程度の時間でできた。続いて授業者から南アメリカ州の特色についてグループで考え、ホワイトボードに書いて発表するよう指示があった。その際、ホワイトボードには文章ではなく、キーワードのみを記入するよう指示があった。

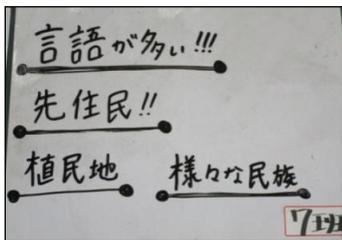


図3-12 南アメリカ州の特色を説明するキーワードの例

図3-12は、南アメリカ州の特色を説明するために子どもたちが挙げたキーワードの一例である。このグループは次のように説明した。

「言語が多い理由は、植民地であり、先住民と様々な民族がいたためたくさんの言語がある。」

この説明の正否は別として、この説明には次の二つの特徴が見られる。一つ目は「言語が多い理由」という、教科書では着目していない内容について説明している点である。このことから、子どもたち自身の考えが述べられているといえる。二つ目は「言語が多い理由」には「様々な民族」がいたことや「植民地」であったことが歴史的背景として考えられるという、アフリカ州での既習事項が活かされている点である。これらのことから、こ

の説明は子どもたちが、既習のキーワードにヒントを得ながら、言語活動を通して考えをまとめ、表現した説明であると考えられる。この説明に至るまでの子どもの思考を評価につなげることも可能であるとする。他にも「産業の分類にキーワードが多かった」からという理由で、ブラジルでバイオ燃料を使った車の開発が行われていることを特徴として説明したグループや、「自然科学のキーワードが多く、自然が豊かな地域と言える」と説明したグループもあった。これらの事例からは、学習内容を図書分類の観点で分類することを通して、どの観点から説明することが地域の特色を最も表すことになるか考えていることがうかがえる。

この学習の途中で、授業者があるグループに対し、次のようなアドバイスをしていた。

(分類ワークシートの「産業」を指さして)「このグループは産業のキーワードがたくさん出てるし、産業的な事は言えそうやね。例えばこの(分類ワークシートの「自然科学」を指さして)地形と関係させたりとかしてみたらどうかな。」

このアドバイスから、授業者が「別の分類(分野)の知識と関連付けて考えさせよう」という意図をもって言葉をかけていることがわかる。このアドバイスをしてから数分後に授業終了となったこともあり、今回の学習内容にアドバイスが活かされたか、検証はできなかったが、意図的にこのようなアドバイスを続けることで、子どもたちは様々な観点の情報を結びつけて考えることができるようになるのではないだろうか。

次に第3・4時、学校図書館を利用した授業について述べる。学校図書館で学習する子どもたちを観察したところ、次のような様子が見られた。

環境問題について「工学・工業」の図書分類の資料を読んでいた子どもが、環境問題にはエネルギー資源が深く関わっていると知り、エネルギー資源とはどのようなものか詳しく知りたいと、「自然科学」の図書分類の中から科学雑誌をさがして熟読する様子が見られた。この事例からは、一つの情報をもとに深く掘り下げようとした結果、他の分野に学習内容が広がっていったことがわかる。このように、学校図書館を活用した学習では、当初の学習課題は社会科のものであっても、調べ進めるうちに他教科の分野に関連する課題に発展していく例が複数見られた。更に、子どもたちのワークシートを例に挙げ、説明する。

次ページ図3-13は複数の図書分類の情報を使って課題を追究している「情報ワークシート」の記

述例である。

一つ目の情報  
WWFが熱帯雨林を救うために世界中から資金を集め200万ドル以上集まり、熱帯雨林の管理と地域の人々の教育につかわれた。

二つ目の情報  
人間が出す窒素酸化物や硫酸酸化物、炭化水素、浮遊粒子物質などが大気をよこし地球温暖化の原因となっている。この中で窒素酸化物、硫酸酸化物、炭化水素が酸性降雨の原因になっている。

三つ目の情報  
再生可能エネルギーとは太陽や水、風のかなど、使えなくなっていく資源を使えるエネルギーのことです。エネルギー資源の乏しい日本は再生可能エネルギーを積極的に採掘する必要があります。

四つ目の情報  
世界ではたばこの廃棄物が増えています。それを減らすためにEUの国を中心に行われている「エコスクール(Eco-Schools)プロジェクト」はヨーロッパの子ども達に学校の環境を支援しています。

図3-13 複数の図書分類を使って課題を追究している例  
一つ目の情報ではWWF（公益財団法人世界自然保護基金）など環境保護団体の取組について、二つ目の情報では地球温暖化の原因物質について、三つ目の情報では再生可能エネルギーなどの技術について、四つ目の情報ではEUの環境教育について調べ、それらを統合して自分の考えをまとめようとしている。

図3-14は興味関心の広がりが見られる「情報ワークシート」の例である。

二つ目の情報  
酸性雨とは雨に空気中の排気ガスなどの...  
よごれがとけたものです。

三つ目の情報  
化石燃料タンクの中のカブリコがエンジンに送られるとちゅうで空気とまじり「混合ガス」になります。このガスに電気火花で点火し、爆発させます。

図3-14 興味関心の広がりが見られる例①  
二つ目の情報で酸性雨の原因が排気ガスであるという情報に当たり、三つ目の情報でガソリンエンジンのメカニズムについて調べている。この子どもがこの後「ガソリンエンジンのメカニズム」について追究しようとするれば、社会科とは異なる分

野で学習課題が生まれ、更に学習内容が広がったり深まったりしていくと考えられる。

図3-15は、同じく興味関心の広がりが見られる「情報ワークシート」の例である。

三つ目の情報  
プラスチックを燃やると高い温度が出て、有毒ガスや二酸化炭素を出して、地球温暖化がどんどんすすんでいく。プラスチックは生と世界にない生物の微生物が自然の世界にはいない。まとめ  
今はまだ、プラスチックを燃やして出る微生物はいないが、いてくれた方が いいなあと思ひました。

図3-15 興味関心の広がりが見られる例②  
この例では、プラスチックを分解する微生物について書いている。これも新たな分野での学習課題につながる可能性が感じられる。

図3-16は興味関心の広がりと同時に、資料選択に論理の組立が見える例である。

一つ目の情報  
地球温暖化は、大気中に温室効果ガスが増えおきたため熱が地球の外に逃げにくくなり、地球の温度が上昇すること。原因は二酸化炭素の排出量が増えたから。

二つ目の情報  
代替エネルギー  
化石燃料は環境破壊をもたらし、永遠に使えるわけではない。そのため、もっと早く再生可能代替エネルギーの開発が進められている。風力、太陽光、原子力、地熱、水力、バイオ燃料、バイオマス、水素ガスなど。

三つ目の情報  
二酸化炭素は地球温暖化の原因物質として知られるが、木が千変万化して植物の骨格や、灰の元になる。だから炭は、木が燃やした材料の力も木植物は石灰石、石油、化石資源と違って二酸化炭素と水と炭酸が無限に再生できる。炭は、少し工夫をばと二酸化炭素を吸い取る。

図3-16 興味関心の広がり論理の組立が見られる例  
この例では、一つ目の情報で現在地球に存在する環境問題の原因物質に二酸化炭素があること、二つ目の情報で対策として代替エネルギーの開発が

進められていること、三つ目の情報で原因物質である二酸化炭素は別の観点から見ると環境問題の解決に役立つことを調べている。この「情報ワークシート」を見ると、一つ目の情報をもとに論理を展開するため、「一つ目の情報→二つ目の情報→三つ目の情報」と順を追って調べていると考えられる。他にも「地球温暖化の現象→温暖化の原因→温暖化防止のための取組」の順に調べている子どもや、「開発と環境保全」という前時の学習課題を追究している子どもなど、複数の資料を思考の筋道に合わせて活用しているものが見られた。ここまで挙げた例は全て、複数の異なる分類の資料、または複数の異なる資料から情報を得ている例である。したがって、論理の組立は図書資料の構成によるものではなく、子どもたち自身の思考によるものであると考えられる。複数の資料を活用することで、情報のまとめを自分の頭で構成することが必要となり、子どもたちは論理の組立を学んでいくことができると考えられる。また、それぞれの情報が異なる観点からの情報であれば、学習内容をより広げていくことができ、また様々な観点から課題をとらえた考察ができるようになると考えられる。学校図書館を活用する際には、情報をどのように選び、組み合わせるかについて、指導者が意図的に条件を設定していくことも、子どもの思考力を高める上で有効ではないかと考える。

また、資料を熟読した後、読んでいた資料を閉じて「情報ワークシート」に情報を書く子どもの様子が複数見られた。学校図書館で調べ学習をする際には、図書資料をそのまま写してレポートを仕上げる子どもの様子をよく見かけるが、子どもにとって興味関心のもてる資料を個々に探す時間をとること、課題に取り組む時間を十分に設けることで、情報を自分の言葉で書き記すことにつながったと考えられる。このようにして得た情報は、ただ資料を写しただけの情報より、子どもの中に定着しやすく、また、別の学習場面でも活用される知識となっていくのではないだろうか。

他にも、「分類ワークシート」を手に資料を探す様子、子ども同士で「その資料なら〇分類にあるよ」とアドバイスし合う様子など、図書分類を手掛かりに自分の求める情報を探す様子が多数見られた。これは第1節で述べた授業実践の成果と考えられる。

### <B校の授業実践>

ここからは学校図書館を1時間利用したB校の授

業について述べる。

第1時「分類ワークシート」にキーワードを分ける作業は、A校と同様、前回より短時間でスムーズにできた。子どもたちの中からは「考えなければならぬので面倒くさい」という発言が少数あった。一見否定的なこの発言からはワークシートに分類する段階で子どもたちが「考えている」ことが感じられる。

続いて南アメリカ州の特色を、キーワードを使って説明する課題を行った。授業者からは「ホワイトボードに文章を書いて説明する」「キーワードのみ赤字にする」と指示があった。図3-17は子どもたちがキーワードを使って説明した南アメリカ州の特色の一例である。

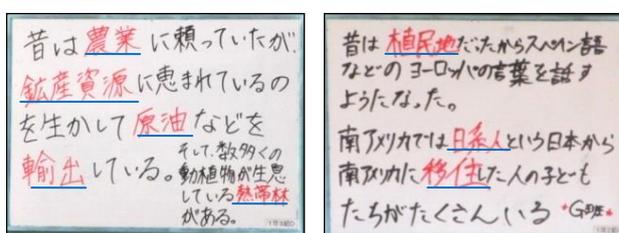


図3-17 キーワードを使った南アメリカ州の説明（下線部が赤字で書かれたキーワード）※下線は筆者による

このホワイトボードを示しながら、各グループの代表が発表した。ホワイトボードに書かれた説明は教科書の文を写したものではないことから、A校と同様、子どもたちが自分たちの言葉で説明していることがわかる。また、植民地支配の影響が言語に表れている点や、鉱産資源に恵まれている点など、アフリカ州での既習事項を活かして説明していることがうかがえる。各グループから挙げられた特色に、授業者が補足説明を加えながら授業を進めた。内容はグループごとに異なるため、結果として単元の内容を全体的にとらえることができる。一方で、子どもたちから挙がってこない特色もあり、授業者が補足した場面もあった。このように子どもたちの説明を活かしながら授業を進めることで、子どもたちにとって、学習内容を自らの力で獲得していく実感が生まれるのではないだろうか。しかし、その説明には的外れなものや、ねらいから逸れるもの、また補足が必要なものもあり、指導者側に、それらを見極め、学習を本来のねらいに導く力量が求められると感じた。

第3時に、学校図書館を利用して課題を追究した。図書館を利用する際には、事前に課題をホワイトボードに示し、子どもたちが作業にスムーズに入れるよう工夫した。B校での授業は図書館利用が1時間に限られていたため、ほとんどの子どもが

一冊の資料で調べていた。時間の都合上、一つ目の情報しか調べられなかった子どもが多かった。一冊の資料の中で筋道を立てて情報を集めている例を図3-18に示す。

一つ目の情報

地球温暖化が進んで、100年間 2.0℃ 以上上昇している。  
北極と南極の氷がとけてきている。このことにより、  
グリーンランドの氷床がとける。そのグリーンランド氷は、地球の気温と  
関係が深く、温かくなると氷がとけてしまっ、海面が上がる  
ほう。

二つ目の情報

再生可能エネルギーとは、太陽光や風力など自然界とくみ返し  
起こる現象<sup>①</sup>によって得たエネルギーのこと。増に利用にも減る心配が  
自然の力でエネルギーは、グリーンエネルギー。

三つ目の情報

Xガソリンエンジンを作って、石油ガスの代わりに  
利用するのバイオマスエネルギー。バイオマスも  
自然再生エネルギーは二酸化炭素をほとんど出さないので、地球温暖化を防ぐ

図3-18 一冊の資料を使い筋道を立てて情報を集めている例  
この例では一つ目の情報で地球温暖化について調べ、二つ目の情報、三つ目の情報ではその対策として再生可能エネルギーやバイオマスエネルギーについて調べている。一冊の資料内で、自分の考えを説明する情報を適切に選んでいることがわかる。学校図書館で資料を活用して学習する際には、資料の筆者や編者によって内容に論理や系統が確立されている場合が多く、子どもは資料を順に読みこんでいくことによって、スムーズに考えを組み立てることができると考えられる。これは、学校図書館で学習する際に図書資料を活用する効果の一つである。

右上図3-19は、二冊の資料を使い興味関心を広げている例である。一つ目と二つ目の情報は同じ資料を使い、地球温暖化の影響について調べているが、三つ目の情報では異なる資料を使って「熱交換塗料」について調べている。一つ目と二つ目の情報は内容が似通っているのに対し、三つ目の情報は内容の分野に違いが見られる。この情報構成からは、独自の興味関心に基づいて情報を選び、自らの考えを発展させたことがうかがえる。一つ目、二つ目の情報で調べている内容は、他の多くの子どもが調べたものと同様のものであるが、三つ目の情報の内容は、他のどの子どもの「情報ワークシート」にも見られない情報であった。このよ

一つ目の情報

現在陸地の約11%が氷や氷河におおわれている。この  
75.9%の氷河が1901~2000年の100年のあいだに  
小さくなってしまった。

二つ目の情報

北極や南極にある氷が広い範囲でとけてきている。  
1978年からの観測データによると、北極海に浮かぶ  
氷の面積は、10年ごとに約2.7%ずつ減少している。

三つ目の情報

「熱交換塗料」というのは従来の塗料は光を反射して  
いたが、この塗料は光を吸収して、それを熱を蒸発して  
ほう反射塗料では反射した場所がまた熱を吸収して、この  
熱交換塗料では反射しないのであつた。

図3-19 二冊の資料を使い興味関心を広げている例

うに、同じテーマで学習を始めても、個々の子どもに合った独自の展開ができる点も、学校図書館で豊富な資料を活用し学習する効果の一つである。

### <両校の授業実践を通して>

この授業では図3-10 (p. 13) に示した「情報ワークシート」を使用した。授業の中で、この「情報ワークシート」に自主的に矢印などを書き込み、自身の思考の流れを表現しているものが複数見られた。図3-20はその一例である。

図3-20 矢印等が書きこまれた「情報ワークシート」

このように思考の流れが書き込まれたのは、一枚のワークシート上に複数の情報とまとめを配置した効果ではないかと考える。一枚のワークシート上に複数の情報を集め、それらが同時に見える状態にすることで、子どもは情報を自分の頭で再構成したり、どの観点の情報を追加すればよいかを考えたりすることができたのではないだろうか。また、自分の考えをまとめて記入する欄も同時に

見えていることで、学習の到達点が常に意識できたのではないかと考える。更に、このようなワークシートであれば、指導者が提出されたワークシートを見た時にも、子どもの思考の流れがよくわかり、パフォーマンス評価などの評価にもつなげることができるのではないかと考える。今後の課題として、「情報ワークシート」を活用する際には、意図的に矢印を書き込ませるなど、更に工夫が必要である。

今回の授業実践では、統計資料などを読み取って考える学習課題が設定できなかつた。学校図書館の資料から、統計資料が多用されているものを選んで使っていた子どももいたが、絶対数は少なかった。学習課題の設定の仕方について、更に工夫が必要である。

### 第3節 様々な情報を利用して自ら課題を設定し追究するための授業

本節では、図2-4 (p.9) に示した「様々な情報を利用して自らの課題を追究する」授業について述べる。

#### (1) 授業の概要

本授業の対象学級はA校第1学年5学級である。この授業では、課題設定のために図2-5 (p.10) の「分類ワークシート」を用いた。

#### <中学1年地理「世界のさまざまな地域の調査」>

この単元の大まかな流れを図3-21に示す。

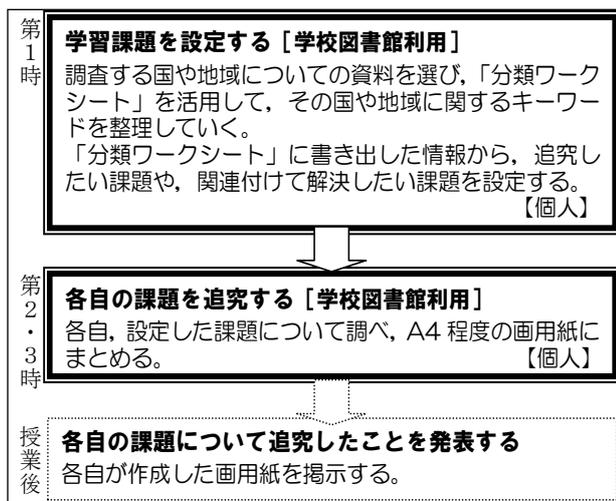


図3-21 「世界のさまざまな地域の調査」授業の大まかな流れ

第1時、子どもたちは、学校図書館で興味のある国や地域の資料を選び、「分類ワークシート」にその国や地域に関するキーワードを書き出した。

国や地域全体に視野を広げた後、自分が追究したいテーマを決め、それに関する資料を探した。資料の数や分類に制限は設けなかつた。調べたテーマについて、A4サイズの用紙1枚にまとめた。まとめる形式も自由とした。学校図書館を使える時間は3時間とし、3時間中の時間の使い方も自由とした。授業後に、第3時までの授業で作成したレポートを掲示し、発表とした。

#### (2) 授業を通して見えてきたこと

図3-22は、テーマ設定のために使用した「分類ワークシート」の例である。

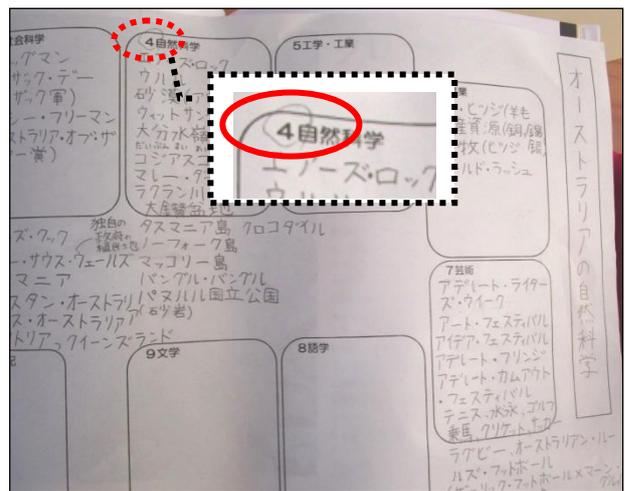


図3-22 テーマ設定に使われた「分類ワークシート」

「4自然科学」のところに○印がついている。この子どもになぜ○印をつけたのか尋ねたところ「オーストラリアを調べたいなと思って、キーワードを書いてみたら、自然科学のところにいっぱいキーワードがあったから、自然科学に特徴があるのかなと思った」と答えた。この子どもは、図書分類の観点を手掛かりとして、国の特徴をとらえ、テーマ設定に活かしていると考えられる。

また別の子どもは、スウェーデンの社会福祉をテーマにしていた。テーマ設定の理由を尋ねたところ「スウェーデンについてキーワードを書き出したら『社会科学』のところ国や社会のしくみについてのキーワードがたくさん入った。ということは、そこに特徴のある国だと思い、その中でも意味がよくわからなかつた『社会福祉』について調べてみようと思った」と答えた。この子どもも、図書分類を手掛かりとしてテーマ設定をしていることに加え、「分類ワークシート」にキーワードを書き出したことによって新しい疑問が生まれ、学習が広がったと考えられる。

更にこのような例もあつた。「シェイクスピア」

について調べていた子どもにテーマ設定の理由を尋ねたところ、「イギリスについて調べたいというのは決めていた。キーワードを書き出してみたら『シェイクスピア』というキーワードがあった。もう少しイギリスに関する情報を探そうと図書館内を見て回っているうち、『文学』の本棚でシェイクスピアの本を見つけた。キーワードの中にあっただなと思い、テーマにした。シェイクスピアをよく知っていたわけではなかった」と答えた。この子どもが「イギリスについて調べよう」という考えだけで図書館内の書架を見て回っていた場合、「シェイクスピア」に注目し、テーマとして設定した可能性は低いのではないかと筆者は考える。

単純に好きな国や地域を選んで調べ学習をするよう指示した場合、その国（地域）の基本情報でまとめられたレポートが多かったり、その子どもが既に知っていることがテーマになったりしやすいのではないだろうか。しかし、図書分類の観点で一度その国（地域）の情報を書き出すことで、その国の特徴的なものは何かと考えたり、今まで知らなかったことに興味をもち、テーマとして追究したりすることができたと考えられる。したがって、「分類ワークシート」をテーマ設定に活用することは、子どもたちの学習内容を広げたり深めたりする上で一定の効果があったと考える。

本授業実践については、子どもたちが作成したレポートについて分析し、第4章で再度述べる。

#### 第4節 学校図書館で追究した内容を学級全体で共有し学習内容を深める授業

本節では、第2節で述べた「複数の観点から見た情報を関連付けて課題を解決する」授業をベースとし、学校図書館で追究した内容を学級全体で共有し、それをもとに各自が学習を深める授業について述べる。

##### (1) 授業の概要

本授業の対象学級はA校第2学年5学級である。この授業では、学校図書館で得た情報を学級で共有する際、その方法を工夫して授業を行った。

##### <中学2年地理 日本の諸地域「東北地方」>

この単元の大まかな流れを右上図3-23に示す。

第1時は、第1節(1)で述べた中学1年地理「アフリカ州」の学習とほぼ同様に、単元全体のキーワードを「分類ワークシート」に書き出した。

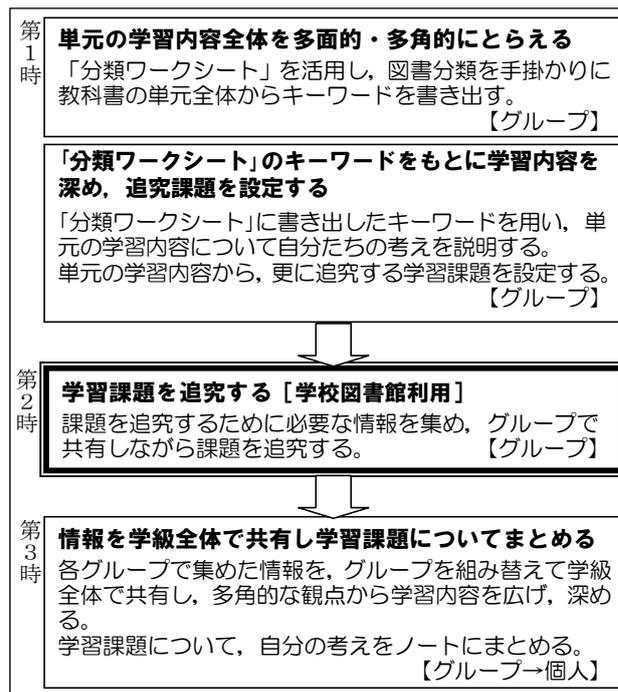


図3-23 日本の諸地域「東北地方」授業の大まかな流れ

その後、学級を6名で構成する六つのグループに分け、各グループで東北地方の特色を挙げ説明した。その後、「東北地方にはなぜこのような特色があるのか」についてグループ毎に仮説を立てた。

第2時、学校図書館での授業では、第1時に各グループで立てた仮説について、学校図書館の資料を用いて追究した。加えて「みんなに紹介する東北地方についてのエピソード」を一つ以上集めるよう、授業者から指示があった。調べた内容について、5学級中4学級では各自のノートに記入するよう指示した。1学級のみ情報カードに記入するよう指示した。図書資料の使い方について、分類、冊数などの指定はしなかった。

第3時は、第2時までのグループ（以下「旧グループ」という）で調べた内容を学級で共有するため、図3-24のように、旧グループの構成メンバーが一人ずつ入る新グループを6つ作った。

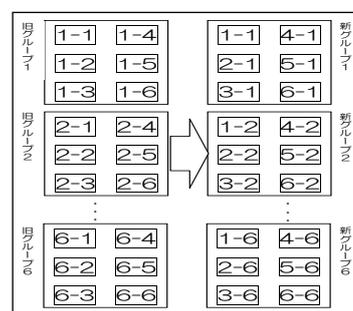


図3-24 「東北地方」の学習グループ

新グループでは、旧グループで追究した内容と「東北地方についてのエピソード」を各々が発表し合い、情報を共有した。このようにして共有した情報をもとに、新グループで東北地方の特色をまとめ、発表した。授業者は子どもたちの発表をも

とに、補足説明を加えながら授業を進めた。その後、各自100字程度で東北地方の特色について考え、自分のノートに単元のまとめとして記入した。この授業では、ほとんどのグループが東北地方の祭を手掛かりに、農業や漁業についての特色を追究していた。

## (2) 授業を通して見えてきたこと

第2時、学校図書館で課題を追究する場面では、次のような会話が生まれているグループが見られた。

- S:1 「暖流と寒流がぶつかる潮目があってそこに魚が集まるらしい」  
S:2 「だから漁業が盛んなんか」  
S:3 「あー、海流あったな。名前は何かあったっけ？」  
みんな ~教科書や地図帳を調べている~  
S:1 「親潮と黒潮や！」  
S:4 「だからリアス海岸にいっぱい港、つくってるんか」  
S:5 「だからそこで、豊漁を願う祭りやってるんや！」  
みんな「おお〜！」

このグループでは、それぞれが資料で調べた内容を共有する中で、既習事項を思い出しながら、子どもたち同士でどんどん学習を深めていた。他のグループでも、果物の栽培が盛んだとわかり、更にその理由を手分けして調べたり、一度情報を共有した後、仮説を裏付けるために足りない情報は何かを検討し、再度探しに行ったりする様子が見られた。

第3時、情報を共有する場面では、グループを組み替え、各自が旧グループの情報を新グループのメンバーに伝えなければならない。そのため、直前に旧グループのメンバーに内容を再確認するなど、個々の子どもに責任感が生まれていた。組み替えたグループでは「雪解け水には栄養分が多く含まれている」「秋田県では地熱発電が行われている」「海沿いに木を植え、風や砂を防いで水田を守っている」など、教科書にはない情報が複数出されていた。このことから、学校図書館を活用した学習を1時間組み込んだことで、教科書だけでは学べないことまで学習内容が広がったといえる。またこれらの情報は、教科書の内容をより深く理解するために有効なものであり、それを指導者が提示して与える形ではなく、子どもたち自身で獲得できたともいえる。このような学び方は、知識の定着や理解への効果だけでなく、学び方そのものを他の単元、他の教科、他の場面で活かせるという点でも意義があると考えられる。

第3時の最後に単元のまとめをする場面では、ほぼ全ての子どもが、まとめを自分の言葉でしっ

かり書いていた。図3-25は子どもがノートに書いた単元のまとめの一例である。

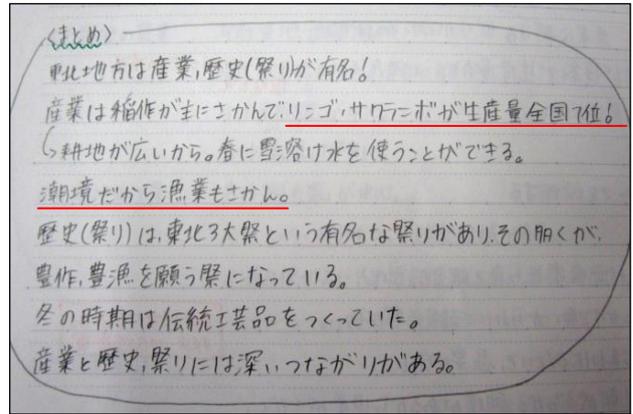


図3-25 東北地方について単元のまとめを書いたノート

※下線は筆者による

下線部は第3時、新グループで発表し合った情報を使ってまとめている部分である。この例のように、ほとんどの子どもが、発表し合った情報を複数使って単元のまとめをしていた。教科書の文を写しただけのまとめや、「祭りが盛ん」など一つの事実のみを書いただけのまとめは、ほぼ見られなかった。通常の授業では、授業者が板書したまとめをノートに写しているだけという例も多く見られた。また新グループで話し合う際、あるグループでは話し合いの途中に「暖かい愛媛や沖縄でミカンを作り、北海道や青森でリンゴを作って、お互いに変換したらどうか」という話で盛んに議論していた。これらのことから、指導者の説明を聞く受け身の授業ではなく子どもたち自身が仮説を立て、追究するための情報を集め、その結果を子どもたち同士の言葉で伝えあって学ぶことで、学習に対する意欲が高まり、様々な情報を踏まえて東北地方の特色をとらえ、表現する学習ができたのではないかと考える。

他にも、この授業を通して気付いた点があつた。次に四点挙げる。

一点目は、当然のことながら、学校図書館で有用な情報を集めたグループが学級内にどれくらいあるか、またどれだけ異なる観点からの情報が集まっているかによって、学級全体の学習の深まりに差が出るということである。そのためには情報を多角的に集めることや、複数の資料を使って検討することなど、学校図書館を効果的に活用する方法を子どもたちに示していくことも必要である。調べる図書分類を指定したり、資料の冊数を指定したりするなど、意図的に条件を提示し、段階を踏んで計画的に学校図書館での学習を取り入れる

ことも大切である。

二点目は、新グループで情報を共有する場面で、個人のノートにはまだ共有していない情報があるのに、その情報が全て出されていなかったことである。中には同じ情報ばかり共有されているグループも見られた。「他のグループにない意見を出す」などの指示を加えたほうが良かったのではないかと感じた。このようなところでも、指導者の的確な学習支援の在り方について考えさせられた。

三点目は、学校図書館で調べた内容を情報カードに記入した学級とノートに記入した学級で、新グループでの情報の伝え方に差があったことである。情報カードに記入した学級では、言葉で説明するのではなく、互いのカードを回し、ノートに写している様子が見られた。情報をノートに記入した他の4学級では、このような様子は見られなかった。学校図書館で調べた情報をその後どのように使うかによって、記録する方法に使い分けや工夫が必要である。

四点目は、子どもたちから全く情報の出ない分野があったことである。例えば東北地方の工業については、ほとんどのグループで情報が挙がってこなかったため、子どもたちの主体的な学習だけでは学びが深まらなかった。授業者からも同様の感想が聞かれ、次の授業の中で補足した。子どもたちから挙がった情報で十分に学習内容が深まっているかどうかを見極め、問いかけたり補足したりしながら授業を進める力量も、指導者に求められる。

## 第5節 授業充実のための連携について

第1節から第4節までの授業実践を行うにあたり、図書支援員との連携、京都市図書館との連携があった。本節ではそれらとの連携について述べる。

### (1) 学校図書館運営支援員との連携

第1節から第4節までの授業では、両校とも図書支援員の連携協力が得られたため、学校図書館で行ったほとんどの授業で、連携して指導・支援にあたることができた。授業内での図書支援員の主な関わりは、授業者と事前に打合せをし、授業の内容に適した資料を準備すること、個々の子どもたちが課題を解決するための適切な資料を選ぶようにアドバイスをすることであった。

本授業実践で、図書支援員との連携により効果が見られた四点の取組について述べる。

一点目は、子どもたちが多角的な観点から課題をとらえるための取組として、図3-26のように図書支援員によるブックトークを取り入れたことである。



図3-26 図書支援員によるブックトーク

A校では文学やエッセイなどの本を2冊程度紹介した。子どもたちは、一見社会科の学習とは縁遠く感じられる本からも、地域の抱える社会問題や生活習慣、歴史、風土などが読み取れることに気付いていた。B校では、図書分類ごとに10冊程度の本を準備し、それぞれの書架の前で紹介した。同じく子どもたちは、様々な分野の中に、課題に関連する情報があることに気付いていた。後述する子どものアンケート調査にも、意外なところに情報があることに気付いている記述が見られた。この取組を授業の始めに行うことで、子どもたちは様々なところに課題をとらえる観点があることを実感したのではないかと考える。また、熱心にブックトークに聴き入る様子や、ブックトークの後、紹介された本が借りられるかを図書支援員に尋ねる様子から、子どもたちの学習内容に対する興味関心の高まりとともに、読書に対する興味関心の高まりも感じることができた。

二点目は、図書支援員と子どもとの間で交わされる資料についての質問とアドバイスである。当初、子どもたちが図書支援員に尋ねていたのは「どの本を選べばよいかわからない」「出典の書き方がわからない」などであった。しかし、授業実践を重ねるにつれて「インドのヒンドゥー教の神様について書いた本は他にありませんか」など、自分の調べたい課題をはっきりさせた質問や、自分で探してみたが他にも資料がないかという質問など、質問内容に変化が見られた。また「ハワイについて調べたいが本が見つからない」と相談に来た子どもは図書支援員と一緒にいろいろな本を探す中で、世界の音楽を扱った本の中にフラダンスやフラダンスに使われる楽器のことが書いてあることがわかり、テーマを絞り込んでいった。このように、図書支援員に質問をしたり、アドバイスをもらったりする中で、子どもは自分の課題をより明確に意識したり、追究する内容を絞り込んだりすることができたと考えられる。図書支援員からは「子どもの調べるテーマが深くなっていくので、こちらが勉強しなければと申し訳ない気持ちにな

ります」との言葉が聞かれた。

三点目は図書支援員の関わりによる、個に合わせた学習支援である。ある子どもが「漢字が読めず内容が理解できない」と相談に来た。図書支援員はまず、漢字にルビが振られた本を薦めた。しかし再度「漢字は読めたけど言葉の意味がわからない」と相談に来た。そこで図書支援員は「この本なら写真が多いよ」「この島はこれ以上温暖化が進むと海に沈んでしまうと言われている島なのよ」と本を薦め、子どもは再度課題に取り組み始めた。別の子どもの例も挙げる。この子どもは、普段から学習にあまり意欲的でない様子であった。学校図書館での学習も当初は捗りしかなかったが、途中から目覚ましい変化を見せ、意欲的に取り組むようになった。授業を記録した映像では、机に伏せているその子どもに対し、図書支援員が自ら、折に触れて声をかけ、一緒に本を探す様子が見られた。また図書支援員不在の授業では、授業開始と同時に「〇〇先生(図書支援員)はいないの?」と残念そうに叫んでいた。これらの例から、図書支援員は資料についての相談に乗ることを通して、自然と個に合わせた学習支援を行うことができたと考えられる。これは子どもたちの学習効果を高める上で、重要な役割であったと考える。

四点目は学習の効果を高める資料選択と準備である。今回の授業実践では、資料の選択は図書支援員に依頼した。図書支援員と授業者が事前に打合せをし、授業に必要な資料を学校図書館及び京都市図書館からの団体貸出で準備した。この際、授業者と図書支援員が打合せを十分行い、授業の単元やねらい、子どもたちにつけたい力などを共有しておくことで、学習課題を追究するにはどのような本が何冊必要か、本をどのように配置するかなど、図書支援員の視点からも授業内容を検討することができた。例を挙げると、第1節で述べた授業では、図3-27のように、京都市図書館から団体貸出を受けた本を学校図書館の本と同じ書架に図書分類ごとに配置した。通常、公共図書館から貸出を受けた本は、学校の蔵書に紛れてしまわないよう、別置することが多い。しかし、今回は図書分類で分けることが授業のねらいを達成する上で重要であったため、図書支援員の協力でのこのよう



図3-27  
団体貸出の図書を  
分類ごとに配置

な形をとることができた。また、両校とも図書支援員からの申し出で、事前に教室での授業を参観してもらうことができ、子どもたちがどのような課題をもって学校図書館で学習するのかを具体的につかんだ上で準備を進めてもらうことができた。

今回の授業実践を通じ、図書支援員が授業に関わることで、子どもたちの学びに様々な効果が得られることがわかった。また、指導者にとっても、学校図書館、図書資料の専門家と連携しながら授業を進めることで、授業の選択肢が広がることがわかった。

## (2) 公共図書館との連携

第1節から第4節までの授業実践では、京都市左京図書館、京都市山科図書館と連携し、資料の団体貸出を受けた。団体貸出の申込や選書については京都市図書館の担当者と各図書支援員との間で連絡を取り合った。この際、図書支援員から京都市図書館の担当者へ、学習する単元に加え、授業のねらいなど、授業者と打合せた内容が伝えられていた。そのため、例えば第1節で述べた「多角的な観点から課題をとらえる学習」では、各図書分類から満遍なく資料を準備してもらうなど、授業に合わせた資料選択の協力が得られた。公共図書館の団体貸出が子どもたちの学習の助けになることはもちろんであるが、公共図書館の担当者にも授業のねらいが共有されていることで、資料の選択に図書資料の専門家の立場から細かな配慮が加えられ、更に学習効果を高めることができると感じた。本授業実践では図書支援員が連絡の窓口となっていた。このことから、指導者と図書支援員の間で授業について十分に打合せが行われることが大切である。

(25) 前掲 (24)

(26) 前掲 (17) p. 14

## 第4章 研究の成果と課題

第3章では、図書分類を手掛かりに、多角的な観点から課題をとらえる力や、複数の観点から見た情報を関連付けて課題を解決する力をつけるための、具体的な授業実践について述べた。本章では、子どもたちが作成したレポートの内容分析、授業実践の途中または終了後に行った子どもたちへのアンケート等を通してその効果を検証する。更に、本研究を通して見えてきた成果と課題について考察する。

## 第1節 生徒対象アンケート調査の結果から

第3章で述べた授業実践の成果と課題を検証するため、生徒対象のアンケート調査を行った。1年生は1回目を「アフリカ州」の学習終了時（以下「アンケート1」という）にA校B校とも同一の内容で行い、2回目をA校は「世界のさまざまな地域の調査」の学習終了時（以下「アンケート2A」という）B校は「南アメリカ州」の学習終了時（以下「アンケート2B」という）に実施した。アンケート2Aとアンケート2Bは、学習内容に合わせて一部異なる内容とした。2年生は「東北地方」の学習終了時（以下「アンケート3」という）に実施した。調査は四件法及び自由記述で行った。四件法の調査項目には「4:とても思う」「3:まあまあ思う」「2:あまりそう思わない」「1:まったくそう思わない」のいずれかで回答することとした。それぞれの調査の回答数は、アンケート1:6学級199名、アンケート2A:5学級173名、アンケート2B:2学級68名、アンケート3:4学級142名であった。

### <アンケート1>

ここでは1年生対象に行ったアンケート1について述べる。アンケート1の質問項目は以下のとおりである。

#### 【四件法で回答する調査項目】

##### ◆「分類ワークシート」を使った学習について

- 「分類ワークシート」は、教科書の内容を整理するのに役立った。
- 「分類ワークシート」は、アフリカ州と他の州を比べるのに役立った。
- 「分類ワークシート」は、アフリカ州をさまざまな角度からとらえるのに役立った。
- 「分類ワークシート」は、いくつかの分類を組み合わせ自分の意見を考えるのに役立った。
- 「分類ワークシート」は、図書館で資料を調べるのに役立った。

#### 【自由記述で回答する調査項目】

- ◇「分類ワークシート」で学習した感想
- ◇図書館を利用した学習で、新しい発見や興味をもったこと
- ◇図書館を利用した学習で良かった点、困った点
- ◇できあがった「大きな分類ワークシート」を見て気付いたことや考えたこと

右上図4-1はアンケート1における「『分類ワークシート』を使った学習」についての調査結果である。

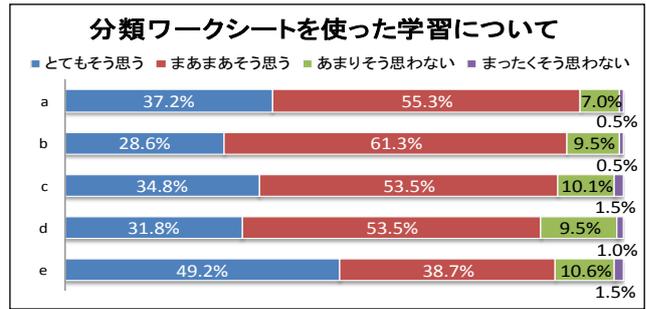


図4-1 「分類ワークシート」を使った学習についての調査

a～eの項目に「とても」「まあまあ」と肯定的に回答した子どもはa:92.5%, b:89.9%, c:88.3%, d:85.3%, e:87.9%であった。これらのことから、ほとんどの子どもたちが「分類ワークシート」を使ったことは、学習に役立ったととらえているといえる。調査項目a「教科書の内容を整理するために役立った」には37.2%の子どもたちが「とても」と回答している。このことから、4割近くの子どもの場合は単元の学習内容を整理するために「分類ワークシート」がとても役立ったととらえているといえる。また、調査項目e「図書館で資料を調べるのに役立った」では49.2%の子どもが「とても」と回答した。これらのことから、約半数の子どもたちが、教室で単元の内容を整理し「分類ワークシート」をもとに学校図書館での学習をするという方法をとても肯定的に受けとめていると考えられる。

次に、自由記述で回答する調査項目に対する回答について述べる。

調査項目「『分類ワークシート』で学習した感想」についての回答の一例を示す。

- ・一目でわかり、最後文章にする時、とりあげやすく、まとめやすかった。
- ・分類分けしたことで、周りの州にあるもの、ないものが一目でわかる。
- ・分類に分けるから、一つの分類を集中して考えることができた。

これらの回答からは、「分類ワークシート」を活用したことで学習内容全体が見渡せたことや、他の地域との比較が容易にできたこと、一つの分野について深く考えることができたことなどがうかがえる。一方で、「活用できなかった」「あまり役立った気がしない」などの記述も数名に見られた。

調査項目「図書館で新しい発見や興味をもったこと」についての回答の一例を示す。

- ・思っていた以上に色んな種類の本があってびっくりした。
- ・語学を調べる中で『ピース』など平和に関する言葉が多く挙がり、平和を伝えるという難問を言葉の力で広げられて、言葉の強さが発見できた。

これらの回答からは、授業が学校図書館や資料そ

のものについて興味をもつきっかけになったことや、今までになかった知識に触れて考えが広がっている様子などがうかがえる。

調査項目「図書館を利用した学習で良かった点、困った点」についての回答の一例を示す。

◇良かった点

- ・分類ごとに調べやすく、まとめやすかった。
- ・教科書に載っていない内容があっておもしろかった。
- ・いろんな角度から見た本があった。
- ・自分で調べるのが楽しかった。
- ・「これはどう?」「これいいやん!」とかのコミュニケーションで班の仲や関わりが良くなった。

◇困った点

- ・(困った点は)なかった。
- ・本を探すのが大変。
- ・思っていた本が見つからなかった。
- ・多すぎてまとめるのが難しかった。
- ・時間が短かった。

「良かった点」についての回答からは、図書分類を活用して調べていること、学習内容が教科書の範囲以上に広がっていること、様々な角度から見た情報を活用できたこと、自ら学ぶことに楽しさを感じている様子、子ども同士でコミュニケーションをとりながら学べたことなどがわかる。「困った点」については、「なかった」という回答が目立った。他の回答からは、資料を探すことや、情報をまとめることに困難を感じた様子などがうかがえる。

調査項目「みんなの調べた内容をまとめた『大きな分類ワークシート』を見て気付いたこと」についての回答の一例を示す。

- ・アフリカのさまざまな点を見ることで、発見、疑問が出てきた。
- ・多い分類や少ない分類があった。
- ・一人では調べきれない分が知れた。
- ・達成感があった。
- ・これをもとにもっと調べていけたらおもしろい。

これらの回答からは、アフリカ州という地域を多面的にとらえられたことや、それが新たな発見や疑問につながったこと、学習する事象を図書分類の観点からとらえ、情報の多い分野や少ない分野があることに気付いていたこと、学習意欲が高まっていることなどがわかる。

<アンケート2A・2B>

ここでは1年生対象に行ったアンケート2A及び2Bについて述べる。アンケート2A及び2Bの質問項目は以下のとおりである。

【四件法で回答する調査項目】

◆図書館を利用した学習について

- a. 図書館を利用した学習で、さまざまな面から国や地域をとらえることができた。

- b. 図書館を利用した学習で、一つのテーマについて深く考えることができた。

- c. 図書館を利用した学習で、いくつかの情報を組み合わせて自分の考えをつくることができた。

- d. 図書館を利用した学習で、班の仲間と学習についての会話がしやすくなった。

- e. また図書館を利用して学習したい。

【自由記述で回答する調査項目】

<2Aのみ>

- ◇「分類ワークシート」を使ってテーマを決めたりそのテーマについて深く調べていくとき、意識したことや工夫したこと

<2A・2B共通>

- ◇図書館で資料を探したり使ったりするとき意識したことや工夫したこと

- ◇今回の学習全体を通して感じたことや考えたこと

図4-2はアンケート2A、2Bにおける「図書館を利用した学習」についての調査結果である。

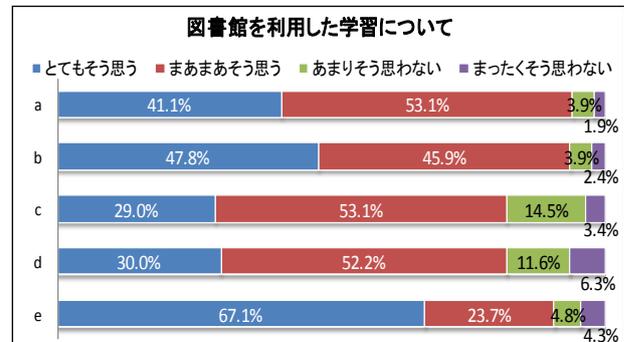


図4-2 図書館を利用した学習についての調査(2校分)

a~eの項目に「とても」「まあまあ」と肯定的に回答した子どもはa:94.2%, b:93.7%, c:82.1%, d:82.2%, e:90.8%であった。a, bの結果からは、9割以上の子どもが学校図書館を利用した学習で、物事を「さまざまな面からとらえることができた」「深く考えることができた」と考えていることがわかる。またcの結果を見ると、「いくつかの情報を組み合わせて自分の考えをつくる」ことについて8割以上の子どもが肯定的な回答をしたものの、項目a, bに比べるとその割合は低かった。このことから、複数の情報を統合して考える力をつけるためには、繰り返し指導する、単純化した課題で段階を踏んで指導するなど、更に指導方法の工夫が必要であると考えられる。dの結果からは、学校図書館を活用したことで子ども同士のコミュニケーションが活発になっていたことがうかがえる。

次に、自由記述で回答する調査項目に対する回答について述べる。

「図書館で資料を探したり使ったりするとき意識したことや工夫したこと」を問う項目に対して、記述内容の類似したものを抽出し集計したところ、

以下のような内容が多く見られた。

- i. 複数の分類から情報をさがそうとした
- ii. 複数の資料から情報をさがそうとした
- iii. 複数の異なる情報をさがそうとした
- iv. 一つの情報から関連する他の情報をさがそうとした
- v. 一つのテーマをふかめようとした

i, ii, iiiから、子どもたちは資料を使うとき、複数の異なる観点から情報を集めようとしたと考えられる。また、ivのように一つの情報から関連した他の情報へと学習を発展させていたり、vのように一つの内容を深く掘り下げようとしたこともわかる。また、これらの回答が自由記述に見られるということは、複数の子どもたちが情報の分野や、物事を見る観点を意識していると考えられる。

また「学習全体を通して感じたことや考えたこと」を問う項目に対して、記述内容の類似したものを抽出し集計したところ、以下のような内容が多く見られた。

- i. いつもより自分で考えることができた
- ii. 新しい発見があった
- iii. たくさん知ることができた、詳しく知ることができた
- iv. 資料を活用する力がついた
- v. 多角的にもものを見ることができた

i, iiから、学校図書館を活用した学習を通して、子どもが自分自身で考えたり、新しいことに気付いたりしたことがわかる。また、iv, vからは、資料を活用する力や多角的にもものを見る力がついたり子ども自身がとらえていることがわかる。更にiiiからは、子どもが学習内容について、広がりや深まりを感じていることがわかる。他にも「本を通して考えをもったり改善策などをたてたりして楽しかった」「自分で調べるのでやる気がわく」「意見交換がしやすい」など、自分自身で学んでいくことや子ども同士で学んでいくことに意義を感じている記述や、「班での会話が増え、様々な視点からのアドバイスももらった」など、子ども同士のアドバイスにも様々な観点があることを感じ取っている記述、「どうやったら見ている人に、文字だけで共感を得ることができるのか考えた」など、自分が学んだことをどう伝えるかという表現方法まで考えている記述が見られた。一方で、「本を見つけるのがたいへんだった」「まとめるのが苦手で時間がかかった」などの記述もあった。しかし、このような否定的な記述は少なく、「今回はうまくまとめることができず満足していないが、次回また頑張りたい」のように次のステップを見据えた意欲的な記述も見られた。

アンケート2Aでは「世界のさまざまな地域の調査」の学習で「テーマを決めるとき、またそのテーマについて深く調べて行くとき、意識したことや工夫したこと」についても項目を設けた。その記述内容について類似したものを抽出し集計したところ、以下のような内容が多く見られた。

- i. 書き出したキーワードを活用してテーマを絞った
- ii. 複数の本や複数の情報から多角的にとらえようとした
- iii. 一つの情報から関連する他の情報をさがそうとした
- iv. 一つのテーマを深く、詳しく調べようとした

iからは、「分類ワークシート」が追究テーマの決定に活用されていることがわかる。iiからは、自分で設定したテーマに対しても、多角的にとらえ、学習を進めていることがわかる。iiiからは、一つの情報から関連した他の情報へと学習を発展させていることがわかる。ivからは、一つの内容を深く掘り下げようとしたことがわかる。また「いきなり国調べをするのではなく、先にその他の州のことについて調べたのでやりやすかった」との記述もあり、段階を踏んで学習したことに効果を感じている子どもがいることもわかる。中には「今回の(学習)は1人でやったけどちゃんとできた」「ちょっと心配やったけど頑張れた」と、グループでの学習を通して、個人での学習ができるようになったことを喜ぶような記述もあった。

図4-3は「図書館を利用した学習」についての調査結果をA校とB校で比較したものである。

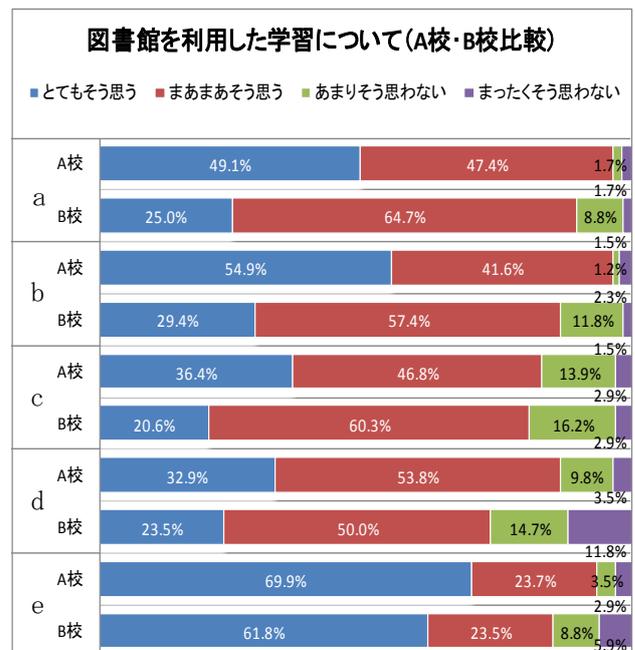


図4-3 図書館を利用した学習についての調査（二校比較）  
二校で「とても」と回答した子どもの割合を比較すると、a:A校がB校の約2.0倍、b:A校がB校の約1.9

倍, c:A校がB校の約1.8倍, d:A校がB校の1.4倍であった。eは両校とも6割以上であった。これらの結果を見ると, どの項目でも, A校がB校より肯定的かつ積極的に学校図書館を利用した学習をとらえていることがわかる。特に質問項目aの多角的な観点に関わる問い, 質問項目bの深く追究することに関わる問い, 質問項目cの複数の情報を統合して考えることに関わる問いで, 「とても」と答えた子どもの割合に差が見られた。この要因として, 第3章第3節で述べた「自ら課題を設定し追究する」授業を, A校のみ, 学校図書館を3時間利用して行ったことが考えられる。この授業は, それまでの授業で行った学習方法を組み合わせたものであり, 子どもたち自身がそれらの方法を使って自分のテーマを追究することを目的としたものである。

「アフリカ州」の学習で多角的に課題をとらえる観点を意識し, 「南アメリカ州」の学習で様々な角度からの情報を組み合わせることを意識し, 「世界のさまざまな地域の調査」の学習で, 自分の関心あるテーマを追究する際にそれらを使っていくことで, 子どもたちは, よりはっきりと, 物の見方や考え方を意識して学ぶことができたのではないかと考える。しかし, B校の割合も決して低いとはいえず, これらの授業で子どもたちに, 少なからず, 目標とした力をつける事ができたと考える。

図4-4は, アンケート2A『「分類ワークシート」を使ってテーマを決めたりそのテーマについて深く調べていくとき, 意識したことや工夫したこと』の回答に見られた, ある子どもの記述である。

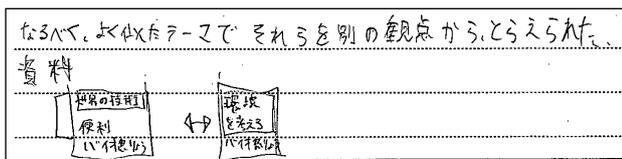


図4-4 アンケート2Aの記述①

この記述からは, 「バイオ燃料」を異なる観点の資料からとらえようとしたことがわかる。また図4-5は同じ子どもの「図書館で資料を探したり使ったりするとき意識したことや工夫したこと」への回答である。

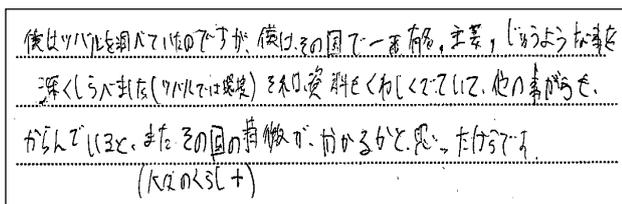


図4-5 アンケート2Aの記述②

この記述からは, 「環境」という事柄を深く追究していく中で, 環境にとどまらず, 環境に関連した「人々の暮らし」など, その国の他の特徴も読み取ろうとしていると考えられる。

これらの記述から, この子どもは一つの事柄を複数の資料で観点を变えて理解しようとしているのと同時に, 一つの課題を追究する過程でも, 別の観点を意識しながら学びを進めていると考えられる。このような見方や考え方をすることで, この子どもは, 自分の課題を単純に結論付けるのではなく, 課題について考える中で, 次の課題, また次の課題へと, 自身の学びを更に広げ, 深めていくことができるのではないかと考える。

### ＜アンケート3＞

ここでは2年生対象に行ったアンケート3について述べる。アンケート3の質問項目は以下のとおりである。

#### 【四件法で回答する調査項目】

- ◆「分類ワークシート」を使った学習について
  - a. 「分類ワークシート」は, 教科書の内容を整理するのに役立った。
  - b. 「分類ワークシート」は, 東北地方と他の地方を比べるのに役立った。
  - c. 「分類ワークシート」は, 東北地方をさまざまな角度からとらえるのに役立った。
  - d. 「分類ワークシート」は, いくつかの分類を組み合わせ自分の意見を考えるのに役立った。
  - e. 「分類ワークシート」は, 図書館で資料を調べるのに役立った。

#### 【自由記述で回答する調査項目】

- ◇「分類ワークシート」で学習した感想
- ◇図書館を利用した学習で, 新しい発見や興味をもったこと
- ◇図書館を利用した学習で良かった点, 困った点
- ◇今回の学習を通して考えたことや感じたこと

図4-6はアンケート3における「分類ワークシートを使った学習」についての調査結果である。

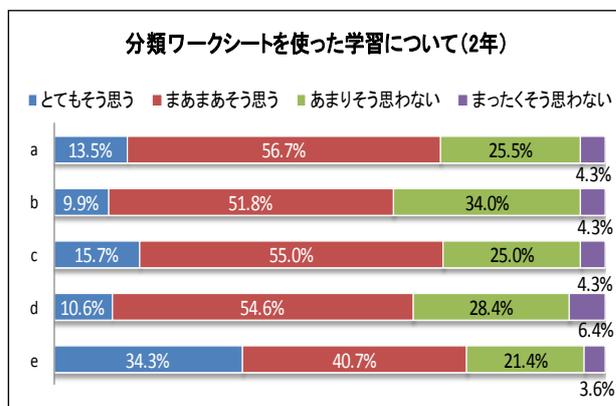


図4-6 「分類ワークシート」を使った学習についての調査(2年)

a～eの項目に「とても」「まあまあ」と肯定的に回答した子どもはa:70.2%, b:61.7%, c:70.7%, d:65.2%, e:75.0%であった。

次に、自由記述で回答する調査項目に対する回答について述べる。

調査項目「分類ワークシートで学習した感想」についての回答の一例を示す。

- ・東北地方は何が栄えているのか一目でわかった。
- ・どこに分類するか悩んだりして、いろいろな見方をすることができた。
- ・いろいろな視点から見て全体を把握するのに役立った。

これらの回答からは、1年生の調査結果と同様、学習内容全体が見渡せたことや、多角的な観点から学習内容をとらえられたことがわかる。一方で「あんなので覚えられるわけない。テストに出したら許さない」「分類する意味がよくわからない」「いつもの授業のほうがわかりやすかった」などの否定的な記述も全体の1/4程度見られた。また肯定的な記述と併せて「その言葉の意味を理解していないとわからなくなる」「自分の意見を作るには単語だけでは難しい」などの難点を答えているものも約1割あった。これらの記述を見ると、多角的な観点から学習内容をとらえようとしている子どもがいる一方で「覚えること」に重点を置いて学習しようとしている子どもがおり、後者にとってこの学習方法は、全く馴染まないものであったと考えられる。また、分類ワークシートを使う意図が子どもたちに伝わっておらず、この学習のねらいが理解されていなかったことも考えられる。更に、1年生と比較して肯定的な記述が少なかった理由として、発達段階から、既に様々な観点で物事を見る感覚が獲得されている子どもがいた可能性も考えられる。そのような子どもにとっては、ことさら、図書分類を使う意義が感じられなかったかもしれない。しかし、図書分類を活用する意図は、あらゆる分野が含まれる観点であるというところにある。その意図を子どもたちに十分に伝えてから、授業を行う必要があったと考える。

調査項目「図書館を利用した学習で新しい発見や興味をもったこと」についての回答の一例を示す。

- ・物語からも東北の特徴がわかることを初めて知った
- ・何かを調べるって楽しいんだなーと思いました。それに、いろいろな本があったので驚きでした。
- ・コメのことだけを書いた本があってびっくり！
- ・農業の工夫に気付いた。

これらの回答からは、思いがけない観点から学

習内容をとらえられたことや、自ら学ぶ楽しさを感じていること、予想外の資料に出合っていることなどがうかがえる。

調査項目「図書館を利用した学習で良かった点、困った点」についての回答の一例を示す。

#### ◇良かった点

- ・詳しく調べられる
- ・自由に調べられる
- ・要点をまとめる力がつく
- ・筆者によってとらえ方が違うことがわかった
- ・自分で調べると頭によく入り、理解力が高まる
- ・本で調べるのもいいなと思った。コンピュータやケータイ(携帯電話)より新鮮な感じがした。

これらの記述からは、複数の筆者の考えに触れ、多角的にとらえる体験ができたことや、自ら学ぶことに意義を感じている様子などがうかがえる。また、コンピュータや携帯電話と比較して肯定的にとらえている記述も見られた。子どもにとって、学校図書館で資料が図書分類ごとに並んでいる環境は、一人一人がコンピュータ画面の中を覗き込むようなインターネット検索に比べ、物事を俯瞰して見るような体験になっているのではないだろうか。更に、他の記述式の項目には回答しなかったり、否定的な回答だった子どもも、この項目には肯定的な内容の記述をしており、このことから子どもたちのほとんどが、学校図書館での学習について肯定的にとらえていると考えられる。

#### ◇困った点

- ・資料が多すぎてどれを選んだらいいかわからなかった
- ・探すのがめんどろ
- ・ピンポイントで調べたいことが本に載っていなかった
- ・テーマに合った本を探せなかった

困った点で子どもが挙げた「ピンポイントで調べられない」という記述は、インターネット検索に慣れた世代の子どもたちにとって当然の困りであると考えられる。また、同じ子どもが「図書館で調べることが楽しかった」と回答した一方で「探すのはめんどろだった」と回答する例も複数あった。1年生のアンケート調査では「(資料が) 見つけにくかったけど、いいテーマの本を見つけると『やっと見つけた!』と思うとすごくうれしかった」「自分で調べたいことが載っている本をさがして、そこからいろいろ調べたりするのが楽しかった」などの記述が複数見られた。このように、簡単には手に入らない情報や答えを探す楽しみや、一つの情報から新しい課題を見つけて学びを進めていく喜びを子どもたちが感じるためには、このような学習を更に積み重ねたり、他にも指導方法

を工夫したりしていくことが必要である。

調査項目「今回の学習を通して感じたことや考えたこと」についての回答の一例を示す。

- ・いつもの「ここはこういうところ」という直接的なことがらではなく、文化や特徴を調べることで、「基礎く応用」というようなことができた
- ・本を使って考える授業は、たくさんの違う意見が出て、話し合えて良いと思う
- ・いろいろなことがわかり、そのわかったことを一つ一つ具体的に調べた

これらの回答からは、発展的に学べたという実感や、子ども同士が話し合う内容が充実していた様子、わかったことを更に追究し、学んでいった様子がうかがえる。一方で「自分たちで調べる学習は楽しいけど、調べていない事もある」「調べなかった事がテストに出るとわからない」などの回答も複数あった。これらの回答からは、テストや評価の在り方について考えさせられる。しかし、子どもたちの回答からは「自分が調べたところ」と「他の人が調べて自分は調べなかったところ」がどこなのか気付いていることもわかる。次の段階として、「自分が調べなかったところ」「まだ理解していないところ」について自主的に学習を深めていくような、能動的な学び方ができるよう、指導の在り様を考えていく必要がある。

## 第2節 個別の課題を追究したレポートから

本節では、第3章第3節で述べた「様々な情報を利用して自ら課題を設定し追究する」授業で子どもたちが作成したレポートの内容分析から見えてきたことについて述べる。

前述の通り、この授業実践では「分類ワークシート」をテーマ設定のために活用した。提出されたレポート数は173、子どもが選んだ国や地域は46であった。また、個々に設定したテーマの重なりはほとんど見られなかった。子どもたちが設定したテーマの例を次に示す。

- ジャズ(アメリカ)、自由の女神と移民の国(アメリカ)、疫病と戦争(イギリス)、ヘブライ語(イスラエル)、宗教(イスラエル)、料理と食材(イタリア)、神話(インド)、ザッハトルテとウィーン会議(オーストリア)、民族問題(カナダ)、文明と都市国家の発達(ギリシャ)、コーヒーの生産(コロンビア)、紛争と独立(コロンビア)、社会福祉制度(スウェーデン)、ライン川の利用(ドイツ)、ヒトラーとアウトバーン(ドイツ)、教育制度(トルコ)、鳥(ニュージーランド)、アパルトヘイト(南アフリカ)、農業の特色(ヨーロッパ州)、オーロラ(ロシア)、宇宙開発(ロシア)など

このように、設定したテーマには多様性がみられる。これは、子どもたちが個々に興味関心のある

ことを追究した結果であると考えられる。また、どのテーマも国や地域に特徴的なものであるといえる。これは、図書資料の内容構成に加え、「分類ワークシート」を活用し、国や地域の全体像から特徴的な事柄へとテーマを絞り込んだことの効果であると考えられる。

図4-7、図4-8はレポートの一例である。レポート①を作成した子どもは、高緯度にあるロシアではオーロラが見えるのではないかという仮説のもと、このテーマについて学習を進めた。学習を進める中で、分子の衝突など、理科学的な内容を掘り下げ、さらにオーロラの色から美術で学習した「光の三原色」について思い出し、吹き出しを付けてレポート中に書き込んでいる。また、レポート②を作成した子どもは、フランスの名所や食文化を矢印で結び、あたかも旅行記であるかのようなコメントをつけてレポートを作成している。これらのレポートからは、子どもたちが学習内容を現実社会の自然現象のしくみや、自身の行動と結びつけてとらえていることがうかがえる。これらは与えられたテーマについてただ調べると

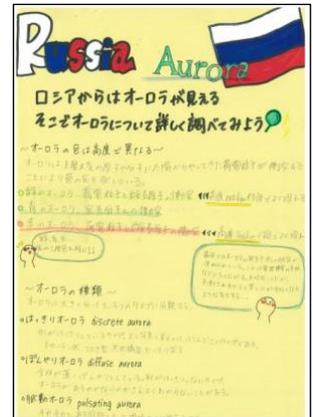


図4-7 レポート①

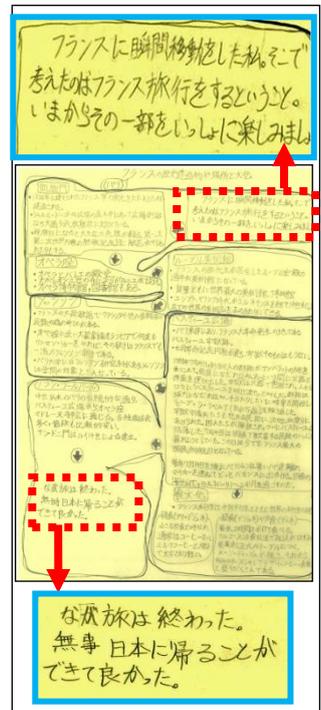


図4-8 レポート②

という学習ではなく、学校図書館で得た情報と様々な教科で獲得した学力の双方を活用して、子どもたちが学習の方向性を実社会の課題や自分の行動へと広げていった結果であると筆者は考える。

授業実践から約3ヶ月後、研究協力員に聞き取りを行ったところ、次のような感想が聞かれた。

- 夏休み(授業実践前)の課題として国調べのレポートを出した時は、ほとんどがウィキペディア(27)などのウェブページから国の基本情報をまる写ししたレポートだったが、冬休み(授業実践後)の課題として歴史人物調べのレポートを出した時は、特に条件を指定しなかったにもかかわらず、本を使っている子どもや、ウェブページでもいくつかの情報を組み合わせたり、より詳しい

ページを選んで使ったりしている子どもが増えた。また、レポートの内容もおもしろいものが増えた。

この感想からは、子どもたちが今回の学習を通して、複数の情報を統合して自分の考えをまとめるという態度や、興味関心を追究しようとする態度などを身に付けたと考えられる。しかしながら授業実践でのレポートを見ると、仮説を検証する形で課題を追究しているものは少なかった。これは、子どもたちに提示した学習課題に「仮説を立てる」というステップが抜けていたためと考える。このことから、子どもが自ら学びを進める場面では特に、指導者による学習課題の精選や提示の仕方、その後の学習支援の的確さが求められるといえる。

### 第3節 学校図書館を活用した学習を通して見えてきたこと

#### ◆子どもたちの姿から

今回の授業実践では、子どもたちが生き生きと学ぶ姿を授業のいたるところで見ることができた。アンケート調査の結果を見ると、子どもたちは概ね学校図書館を活用した学習を積極的かつ肯定的にとらえていた。また、授業を通して「多角的な観点を意識して学習することができた」「一つのテーマを深めて学習することができた」ととらえていることがわかった。これらのことから、学校図書館の図書分類を様々な形で学習に取り入れることは、子どもたちが物事に多面性があることを知り、多角的な観点からとらえる体験をする方法として有効であり、自らの疑問や課題を深く追究する学習にも有効であると考えられる。

しかしながら、前節でも述べた通り、授業後のアンケート調査では、学校や学年ごとに回答内容に差が見られた。三つの段階を踏んで授業実践を行ったA校1年生の回答には、様々な角度から課題をとらえて考えたり、自分で自由にテーマを追究したりすることに、喜びややりがいを感じている様子が見られた。一方、学校図書館での授業実践が少なかった子どもたちほど、この学び方に意義を感じない傾向があった。学年による発達段階の違いや、学習に対するとらえ方等に違いはあるかもしれないが、子どもたちに自分の力で学ぶ喜びや、物事を深く追究し、様々な観点から考えることのおもしろさを伝えるには、意図的、系統的に学校図書館を使った授業を組み入れることが大切である。

学校図書館を活用した授業では、子どもが自ら

の力で学ぶアクティブラーニングが中心となる。アンケート結果からはもちろんのこと、授業を観察する中でも、自ら学ぶことに喜びや達成感を感じている子どもの姿が多く見られた。授業が始まる前の休み時間、学校図書館に走り込んできて「先生！もう調べ始めてもいいですか！」と課題に取り組む姿や、お互いの調べている本やレポートを覗き込み、アドバイスし合う姿、「その資料ならさっき見たよ」と声をかけ合う姿など、自らの課題を追究すると同時に、子ども同士でコミュニケーションをとりながら学びを広げ、深めていく様子が、どの学級でも見られた。子どもならではの疑問や発見、意欲的に学ぶ姿など、指導者が褒めたり応援したりできる場面がたくさんあり、「子どもの学ぶ姿」から指導者が学ぶことも多いと感じた。また、子どもが学んだ内容の中に、指導者が知らない知識や情報もたくさんあり、子どもと共に学ぶ楽しさもあると感じた。研究協力員からも「子どもが様々な情報を見つけてくるので指導者も聞いていておもしろい」「自分で調べることで子どもたちの意欲が高まっている印象があった」などの感想が聞かれた。しかし一方で、指導者が提示する学習課題が適切でなかったり、子どもたちに学習の意図や目標が的確に伝わっていなかったりすると、学びが深まらなかったり、ねらいが達成できなかったりすると感じた。個々が異なる課題を追究することが多い学校図書館での学習は、教室での一斉授業に比べ、途中で軌道修正することが難しい。研究協力員からも「何を求めに学校図書館に来るのかをしっかりと示すことが大切」「課題設定の難しさを感じた」などの声が聞かれた。学校図書館を効果的に活用するためには、指導者側にも学習課題を精選し、提示の仕方などを考え、工夫していく力が求められる。

アンケート調査の回答にもあったように、子どもたちの中には、この学習方法がテストの点数に結びつかないと考える子どもが複数いた。パフォーマンス評価など、評価方法の改善、工夫が盛んに行われている中、現在中学校現場で行われている定期考査やそれらをもとにした成績評価が子どもたちの学力を様々な方向から評価できるものになっているかは疑問である。また、そのような評価を続けてきた結果、子どもたちが「正解を覚えること＝学ぶこと」ととらえ、子どもたち自身の学習の幅を狭めているとも考えられる。この点も、指導者側が考えていかなければならない課題である。

#### ◆指導者の関わりについて

本授業実践では、授業者が個別指導にあたる様子が多く見られた。子どもたちは授業者に、「漢民族って何ですか。少数民族とどう違うのですか」「ナチスのことがよくわからない」など資料の内容についての質問や、「テーマがどうしても決められない」「まとめ方がわからない」など課題の進め方についての相談をしていた。このような様子は第3章第1節から第4節の授業実践で、A校、B校の授業者に共通して見られた。授業者は質問や相談を受け、個々の子どもに丁寧に説明していた。また、授業者が子どもと一緒に本を探す様子も多く見られた。一緒に本を覗き込みながら、授業者自身が新しい発見や今までもっていた疑問が解消されたことに喜んでいたり場面もあった。更に授業を見学しに来た他の教職員が、子どもが広げている資料をきっかけに、相談に乗ったりアドバイスをしたりしている場面もあった。

学校図書館を活用した学習では、子どもたちが自分の能力や課題の進度に合った資料を選んで学習することができるため、教室での一斉授業に比べ、より個に合わせた学習支援が可能である。また、コンピュータ等の画面と異なり机の上に資料を広げることによって、子どもの学習状況が可視化されやすく、授業者はもちろんのこと、他の教職員までもが、個々の課題にスムーズに対応することができたと考える。また、指導者が子どもと同じ目線で、互いに学び合う時間ももてると感じた。一方、子どもが適切な課題を選んでいるか、その課題を発展させるためにはどのような方向に目を向ける必要があるのか、他の観点から検討することはできないかなど、子どもが学習を進める方向性を見定め、自らの力で学べるようアドバイスをする力量が、指導者側に求められると感じた。

#### ◆連携を通して広がる可能性

今回の授業実践では、様々な連携協力を得ることができた。図書支援員による授業支援もたいへん大きな力となった。資料の選択、準備はもちろんのこと、資料についてのアドバイスを通じて、子どもたちへの学習支援ができた。また、授業者と図書支援員が打合せを十分に行うことで、より効果的に学校図書館での学習を進める方法を考えることができた。更に、公共図書館からも協力を得ることができ、学習内容を広げ深めることができた。子どものアンケート調査にも「図書室には京都市図書館の本も中学校の本もあるから、題材

にできる本が多かった！」などの感想が見られた。日常的に、これらの連携をうまく活用できていない学校も少なくないと感じる。指導者が一人で抱え込んで授業づくりをするのではなく、これらの連携をうまく活用することで、授業に新たな可能性が生まれると考える。

#### ◆研究全体を通して

本研究では、インターネット等、情報通信技術の発達により、情報が溢れる時代に育った子どもたちに、あえて学校図書館を活用し、物事を多面的にとらえ、多角的な観点から検討したり、様々な情報を組み合わせて新しい考えを創造したりする基盤となる学びの力をつけることを目的として授業実践を行った。このような学びの力は、中学校での学習にとどまらず、進学したり、社会に出て働いたりする中でも学び続ける力につながると考えている。また、学び続ける力とは、単純な学習という意味合いだけでなく、人生において様々な課題に直面した時や、他者と協力して社会を作っていく過程などで、物事の多面性を意識し、課題や状況を多角的な観点から検討したり判断したりしながら、たくさんの情報や立場の異なる考え方を組み合わせて、よりよい解決策を導き出している力であると考えられる。

学校図書館を活用した学習は、子どもが自ら学び考える力を引き出し、伸ばす、有効な手段の一つである。これらは正に、今求められる資質・能力である。子どもたちの資質・能力育成のため、各学校に設置されている学校図書館の積極的な活用が求められている。

(27) Wikipediaフリー百科事典 [https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia\\_2016.3.4](https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia_2016.3.4)

#### おわりに

本研究の趣旨を理解し、教育実践に取り組んでくださった、京都市立高野中学校と京都市立山科中学校の研究協力員の先生方をはじめ両校の教職員の皆様、全面的に協力してくださった両校の学校図書館運営支援員の方々、快くご協力いただいた京都市図書館の皆様に感謝の意を表したい。また、普段とは異なる授業に戸惑いながらも、生き生きと学習に取り組む姿から、学び続けることの喜びや楽しさを改めて教えてくれた両校の子どもたちに、心から感謝したい。